
盗賊ブレイブ@海賊と体力測定

ブレイブ&秋留

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

盗賊ブレイブ@海賊と体力測定

【Nコード】

N0333D

【作者名】

ブレイブ&秋留

【あらすじ】

【ブレイブシリーズ3】半獣人化したカリユを治すため、アステカ大陸にあるガイア教会本部を目指した一行だったが、航路に海賊が出るために船が出ず、港町ヤードで足止めを食らっていた。身体が鈍ってきたカリユは、開催されたレベル測定大会に意気揚々と参加。その姿が、船の護衛を探していた商人の目に留まる。「レイド・ツイスターの皆さん、私達の船の護衛をしてください！」果たして、ブレイブ達は無事にアステカ大陸に渡ることが出来るのか？！

プロローグ

「もういい加減、海の幸も食べ飽きたな」

俺は一緒に食事を取っている仲間達の方を見る。

正面の真つ青な毛並みをした獣人が海老フライをフォークで弄びつつ頷いた。その獣人の顔は不機嫌そのものだ。

「老人の胃には優しいんだがのお」

「でも最近少し老けたんじゃない？」

俺の左に座っている少しダンディな感じの老騎士の台詞に、俺の右側の女性がおどけて答えた。

俺は窓の外を眺める。潮の香りが漂って来た。

ここはチエンバー大陸の南方に位置する港町ヤード。この町に到着してから1ヶ月程経過しただろうか。今では町の裏路地にある様な見つけ難い店までも知り尽くしてしまった。

「この辺一帯の依頼はこなしちゃったからなあ。暇だよなあ」

懐の錢袋の感触を確かめる。色々な依頼料や悪人を治安維持協会に引き渡した謝礼金で俺の懐はポカポカだ。

なかでもとある魔族の館から押収したオリハルコンの像と短剣は合わせて六千万カリムにもなった。残念だったのはオリハルコンの像が銀と混ぜ合わせた安物だったという事だ。あれが純オリハルコンなら億を超えると買取専門店の店主も興奮して言っていた。

暇な俺達は細かい依頼も数多くこなした。その代わりにこの港町ヤードは大した悪人もいない、冒険者にとっては退屈な町と化してしまった。

「もう雑魚相手に戦うのも飽きた！俺の正義の腕が鈍っちゃまうよ」
目の前の悪人面をしている獣人が不自然にも正義を語る。

俺達パーティーのリーダーである獣人のカリユー。色々な諸事情で今は獣人をしているが元は生粋の人間だ。

性格は熱血一筋で楽をするのは大嫌い。正義のためなら命も掛けるという、俺に言わしてみれば、ただの大馬鹿者以外の何者でもない。

カリユールは獣人になった事を後ろめたく思っているのか、今まで青一色に統一されていた装備を一新して、目立たない茶色を主にした装備にしている。まるでどこかの盗賊団を指揮している獣人のようだ。

俺の考え事の内容に気付いたかのようにカリユールは俺を睨み始めた。

俺は眼を反らして渋いお茶をズズズと飲んでいる老騎士を見る。

「ブレイブ殿もお茶飲みますかな？」

「いや、遠慮しとくよ」

聖騎士のジェットは持ち上げた急須を寂しそうにテーブルに戻した。

どんな時でもお茶を手放さない老騎士のジェット。若いメンバーばかりの俺達パーティーの保護者的存在だ。

ジェットもこの町に滞在している間に装備を新しい物に変えていた。真新しい淡い水色の鎧は店内の明かりを反射して綺麗に輝いている。

聖騎士であるジェットは本来なら聖なる力を持つ鎧などを装備する事も可能だ。

しかし装備出来ない理由がある。

ジェットは死人なのだ。聖なる力を発するような装備を纏った瞬間にジェットは苦痛により転げまわる事になる。俺達とジェットが出会った当初は死人の身体に慣れていないジェットにも色々な事があった。今では死人の身体にもすっかり慣れたようだが。

「ここのお茶、結構美味しいよ」

我がパーティーの紅一点、幻想士の秋留が美味しそうに食後のお茶を飲み干した。

「そうか？ 秋留も結構お茶好きだよな」

俺は満面の笑みで答える。いつ見ても秋留は太陽の様に眩しく美しい。

俺達パーティーの頭脳であり、各種魔法を唱える事も出来る才色兼備の秋留。ジェットを死人として復活させたのもこの秋留だ。

秋留はこの町で手に入れた、新緑の鎧という魔力のこもった緑色の鎧を身に着けている。スカートは左右で長さの違うデザインとなっていて秋留の右足が怪しく俺を誘う。

俺は同じテーブルについているパーティーを再び見回した。このパーティーを組んでから三年位たっただろうか。今ではメンバーそれぞれ癖まで分かるようになった。

「カリュー、暇なもの後少しの辛抱だよ」

「そうだったな！ 久しぶりに俺の腕が試される時が来たんだった」
秋留の励ましにカリューが立ち上がってガッツポーズを取る。恥ずかしいから止めてくれ。俺の耳にはザワザワと噂している声が鮮明に聞こえてくる。

「俺が本物の勇者である事を全人類に知らしめてやるぜ」

自称勇者のカリューが尚もガッツポーズを取りながら大声で叫んだ。熱血街道まっしぐらといった感じだ。

俺達のパーティーは、自称勇者である獣人のカリュー、死人である聖騎士ジェット、女神兼幻想士の秋留、そして最期の切り札、盗賊である俺様ブレイブの四人パーティーだ。魔族討伐組合に属している冒険者のほとんどが四人パーティーと言ってもいいかもしれない。

ちなみに魔族討伐組合とは、モンスターや魔族に襲われている町や村があると言った情報から、三丁目のオッサンが猫を探していると言った初心者向けの依頼まで取り揃えている民間企業である。

その魔族討伐組合の子会社『レベル認定友の会』が開催するレベル測定大会が一週間後、この港町ヤードで開催されるのだ。

「待っている！ レベル測定大会！」

カリューが右手に持ったフォークから海老フライが空しく落ちた。

俺達は昼食を食べ終えて宿屋に戻る大通りを歩き始めた。一週間後に控えているレベル測定大会のためか大通りを歩く冒険者の数も多い。

「食後の運動しないか？」

カリユーが拳を鳴らして言う。その獣人の顔で言うところから悪事を働くように聞こえるぞ。

カリユーの言う食後の運動とは、この港町周辺を見回って手頃なモンスターを倒すという事だ。レベル測定大会の知らせを聞いてからは、カリユーは毎日のように運動に行きたがる。

「ここ二、三日は出掛けてないですな。たまには良いんじゃないかのお」

ジェットは快諾しているが、俺は金にならない事はしない主義だ。確かにレアなモンスターを倒せば珍しい牙や毛皮を高く買い取って貰える。しかし今、この港町ヤードの周りには俺達と同じような考えで狩りをしている冒険者パーティーが沢山いる。

しかもヤード周辺に現れるモンスターは雑魚ばかりだ。

「ガオオオオオ！」

カリユーが血に飢えた獣の様に雄叫びをあげた。周りを歩く一般人や他の冒険者が一斉に遠ざかる。

「カリユーのストレス発散のためにも町の外に出たほうが良さそうだね」

秋留がボソリと呟いた。

「お、やってるやってる」

港町ヤードのゲートを抜けると早速近くでモンスターと戦っているパーティーがいた。まだまだ初心者ようだ。

冒険者同士のルールとしては、基本的に戦闘中のモンスターの横取りはしてはいけない。「助けてくれ」と叫んでいる場合は別だが。「俺達ももう少し進んでみようぜ」

カリューが大きな舌で口の周りを舐めながら言った。

ヤードが小さく見える程に歩いた頃、第一モンスターを発見した。人間と同じ位の大きさをムカデの様なモンスター、モゾムだ。

虫の嫌いな秋留は少し離れた木の陰からこちらを覗いている。まあ、モゾムは低レベルなモンスターだから、全員で狩ることもない。木の陰にいる秋留から目線を前に戻すと、モゾムは既に真つ二つになっていた。その二つになった身体がジワジワと燃え始めている。「全然物足りないな」

右手に持った業火の剣を鞘に収めてからカリューが言う。

業火の剣は港町ヤードの武器屋で見つけた魔力を持つ剣だ。その刀身からは名前の通り業火が舞う、という武器屋の親父の話だったが、実際は剣を突き刺すと微弱な火が立つ程度の代物だった。

野宿の時は肉を焼くのに便利、と馬鹿にしたらカリューは鬼の様に怒っていたつけ。

「お、次が来たぞ」

またしても低レベルなモンスターかつ良く見かけるモンスター・No.1のゴブリンが現れた。三匹で仲良く走って来る。それぞれ棍棒や短剣等を装備している。

カリューが地面を蹴りモンスターの群れへ飛び込む。一瞬で三匹のモンスターの身体が崩れた。

って、俺達は何もせずにつ立っているだけか。ジェットは近くの木の下で秋留と一緒にお茶を飲んでいる。俺もその隣に腰を下ろした。

「カリューって前より凶暴になったよね」

秋留が呟く。

確かに人間だった時よりもモンスターの倒し方が残酷になり、言葉が汚くなった。

しかし戦い方が荒々しくなったと同時に、強くなったのも事実だ。獣人の特徴である素早さが追加されたためだろう。

このままカリューが獣人のままだとどうなってしまうのだろうか。

カリユーの場合は元から獣人だった訳ではない。

色々な偶然が重なって獣人となってしまったのだ。その身体には危険な因子も含まれているに違いない。

「早くガイア教会本部に行つてカリユーを見てもらいたいんだけどね」

俺達はカリユーの獣人化の謎を解いてもらうため、アステカ大陸にあるガイア教会本部を目指しているのだ。

「船がないとはのお」

そう、ジェットが言う通り、アステカ大陸行きの船が無いのだ。

元々アステカ大陸行きの船は少ないし、今はこのチェンバー大陸とアステカ大陸を結ぶ航路に腕の良い海賊が出現するという事で、船乗り達も尻込みしている。

そんな諸事情のせいで、港町にいる船乗り達はアステカ大陸に行く事に関しては首を縦には振ってくれない。

「おらおら！ さつさとかかかってきやがれ！」

少し離れた所ではカリユーが元気にモンスターの相手をしている。周りにはモンスターの死体が増えつつあった。どの死体も半分燃えている。

「業火の剣は切れ味も良くてカリユーは気に入っているみたいだけど、あれじゃあ毛皮も牙も売れないんだよなあ」

俺は半泣きになりながら愚痴った……。

日が西に広がる大海原に沈み始める頃、俺達は港町ヤードへのゲートに戻ってきた。

「やあ、お帰り！」

すっかり顔見知りとなった門番が声を掛けてくる。こいつの名前は覚える気もないので知らない。この門番は大きな町を守っているとは思えない程、気の抜けた奴だ。

生きていれば百十六歳のジェットや、身分証とは見た目の違う獣人のカリユーをすんなり通すのはおかしいのだが、この門番は適当

な会話で俺達を通してしまっている。

「今日はどうでした？」

「雑魚ばかりで腕が鈍っちゃうよ」

十分過ぎる程無駄にモンスターを倒したカリューが答える。カリュー以外の俺達三人はカリューの攻撃から逃れてきたモンスターを二、三匹倒した程度だ。

俺達は無能な門番を通り過ぎ、大通りを歩いて最近ずっと世話になっている宿目指して歩き始めた。今の時間なら宿の夕食が食べれそうだ。

「腹が減ったな」

獣人になって食欲も増大したカリューが言う。俺も軽く運動をしたせいで腹が減った。

「ワシは銀星の様子を見てくるですじゃ。終わったらすぐに宿に行きますので、先に食事を取って置いて構わんですぞ」

ジェットはそう言うとお通り横道に入っていった。その先には冒険者達が自分の馬を預けている共用の馬屋がある。

銀星とは、ジェットと共に秋留に死馬として復活させてもらった生前からのジェットの愛馬だ。最近長距離の移動が無いため、銀星の出る幕が無い。

大通りの左側に俺達の泊まっている、魚のお宿の看板が見えてきた。

俺達は数々の依頼をこなした懐が暖かいために、この宿に一人ずつ部屋を取っている。普段は秋留一人の部屋と残りの野郎共の部屋で二部屋取っているのだが、俺的には秋留と同じ部屋で寝たい……。

「ブレイブ、何ニヤけてんの？ 宿に着いたよ」

「おお、帰ったか！」

門番同様に顔見知りとなった宿屋の主人が大声で話しかけてくる。基本的に人見知りをする俺は他人とはあまり付き合いたくないのだが、一ヶ月も同じ町にいと顔見知りも自然と増えてきてしまう。

「今日は珍しい魚が手に入ったんだ」

「じゃあ、それ頂こうかな」

秋留が可愛く答える。俺は秋留の見た目だけではなく、楽器のハープの様な美しい声も大好きだ。

「さすが秋留ちゃん！」

宿屋の親父が馴れ馴れしく言う。俺は思わず腰にぶら下げているネカーとネマーを構えようとした。

それに気づいたのか秋留が白い眼で俺を睨む。

俺は咳払いをすると両手を大人しく下に下ろした。

ちなみにネカーとネマーは鉛の弾の代わりに硬貨を発射する事が出来る、世にも珍しい銃だ。俺は冒険者になった時からこの二丁の拳銃を使っているため、自慢出来る程にその命中率はズバ抜けている。

俺の職業は盗賊じゃなくて銃士としても十分にやっつけていけるだろう。

席に着くとすぐに宿の親父が料理を運んできた。ちなみに親父の名前はフィッシュだ。港町に生まれたかららしいが両親も思い切った名前をつけたもんだ。

「今日はジエットの爺さんは居ないのかい？」

「間に合いましたかな？」

ジエットが宿屋の親父の問いに答えて席に着く。

早速、珍しい魚らしい刺身の活け造りが宿の店員によって運ばれてきた。

「ゴールデンフィッシュっていつ分かりやすい名前の魚なんだがね」
フィッシュが腕組みしながら説明する。

俺は早速その魚の値段を聞いた。一匹一万カリムはするということ事だった。俺は今後の航海に備えて高価な魚の名前を心に深く刻み込んだ。

それから俺達は美味しい魚に舌鼓を打ち、それぞれの部屋に戻っていった。早速俺は汗を流すために部屋に付いている風呂に入る。やはり風呂は気持ち良いし疲れが取れるな。

「後一週間か」

風呂の低い天井を見上げて独り言を言う。

以前レベルを測定したのはゴルドウィッシュというチエンバー大陸の隣にある大陸にいる時だった。俺達パーティーが出会った大陸であり、あれから三年が経過している。一体、どれ位レベルが上がっているだろうか。まさか下がってはいないと思うが。

レベル測定大会は、職業毎に異なる検査項目によりレベルを測定する大会だ。戦士なら体力や武術を中心に、魔法使いなら魔力測定が中心だ。ちなみに盗賊は洞察力なんかを調べたり、実際に罠のある宝箱を開けるような項目もある。

だからあまり冒険をしていなかったり怠けていたりすると、レベルが下がる事もある。

後、残念ながらゾンビに大会参加資格は無い。一般の魔族討伐組合に名前を登録している冒険者が対象だ。今回ジェットは一人で留守番となる。

俺達の心配事は種族が変わってしまったカリューだ。レベル測定大会には参加出来るのだろうか？

「誠意があれば参加出来る！」と豪語していたが、参加出来ないとなった時の暴れ様が怖い。

俺は長めの風呂から上がると、部屋に置いてある炭酸飲料を飲み干した。二十歳を過ぎたのだからビールでもキユ〜っと飲めば様になるのだが生憎酒にはあまり強くない。一方、カリューとジェットは酒が大好きだ。秋留はあまり酒を飲まないが、強いのだろうか？

「とりあえず、寝るか」

秋留の事を色々と考えつつ部屋の明かりを消して布団に潜った。

第一章 レベル測定

あつという間に一週間が経過した。

あれからもう一回カリューの運動に付き合わされたが、それ以外は何とかノンビリとした時を過ごせた。

今日はレベル測定大会初日、開会式がヤードの海際に建っている多目的ホールで行われる。

ここで参加者登録も行われるため、かつたるい開会式にも出なくてはいけない。

「早く準備しろ〜！」

気の早いカリューが部屋の外で怒鳴っている。開会式は午後二時から。今はまだ十時……。まだ起きたばかりなんですけど。遠足前のガキか、お前は。

「カリュー、早いね〜」

「お、秋留。珍しく早いな」

「今日は目が早く覚めちゃったんだよ〜。もつと寝ていたかったんだけど……」

「やっぱり秋留も興奮して眠れなかったのかあ！俺も興奮して眠れなかったんだ！」

ドアの外で秋留と会話しているカリューに、激しい嫉妬心を抱きながら急いで出かける準備をした。今日は開会式だけだが、沢山の冒険者が集まるので馬鹿にされない様な装備をしていかないといけない。

俺は内側に色々と仕込んでいる袖のないコートを羽織った。このコートは飛竜の羽で出来ている特殊性で、羽自体に浮力があるために内側に装備した物が若干軽くなる。

「待たせたな」

若干息を切らしながら勢い良くドアを開けた。派手な音を立ててドアがカリューの顔面に当たった。

「おはよ、ブレイブ」

「おはよう、秋留！ 今日もとってもきれ……」

「とっても綺麗だね」と危つく本心を声に出しそうになったのを、口を押さえて防ぐ。

「うん？」

秋留が可愛く頭を傾げる。

「とってもきれが良いね！」

なんとか訳の分からない事を言って誤魔化した。秋留は苦笑いをして「まだ寝ぼけているんだね」という眼で俺を見た。そんな眼で俺を見ないでくれ……。

「皆さん、揃いましたな」

ジェットが自分の部屋から顔を出した。しっかりと装備をしている。

「あれ？ 今日は留守番しているんじゃないの？」

「昨日フィッシュさんに聞いたんじゃないが、今回のレベル測定大会は冒険者ではない一般人も見物する事が出来るらしいですよ」

「え……！」

俺は思わず大声を上げてしまった。一般人に見られる……。俺は基本的に人に注目されるのが大嫌いだ。

レベル認定友の会め！ 金儲けのために冒険者を見世物にしようか。つて。

「一般人共に俺の強さを見せる時が来たな！」

カリューは一段と気合が入ったようだ。秋留もどこか嬉しそうだ。人に注目されるのが嫌いではないのだろうか。

「お！ 勇者パーティー御一行様の出発かな？」

宿屋の親父が宿屋のドアの前で待ち構えていた。朝から元気が良いもんだ。

「親父も見に来るのか？ レベル測定大会」

「俺は店があるからな。大人しく留守番しているよ」

自称勇者カリューの問いに親父が心底残念そうに答える。てめえ

は来るんじゃないやねえ！ 少しでも一般人の見物人を減らしておかないといつもの半分も力が出せそうにない。

眩しすぎる太陽が俺達を照らす。開会式にピッタリの雲一つ無い快晴だ。

「太陽も俺の活躍を期待しているようだな」
若干暴走気味のカリューが言う。

獣人化したせいで性格も変わってきているようだ。前は冗談も通じないような生真面目人間だったのに。

宿屋の前の大通りはレベル測定大会開会式に向かう冒険者で溢れていた。そいつらの眼が俺達に向けられているのが分かる。

「あ、秋留だぜ。相変わらず可愛いよな」
「レッド・ツイスターだな。カリューの姿が見えないぞ」

「代わりに獣人を仲間に入れたのかしら」
通りに行く冒険者達のヒソヒソ声が隣で話しているかのように聞こえてくる。俺の盗賊としての能力のお陰で少し離れた会話も手にとるように分かってしまう。とりあえず秋留の事を喋っている奴の脳天に硬貨をブチ込んでやろうか。

「俺達も腹ごしらえをしてから開会式に向かおうぜ」
カリューが舌舐めずりをして言う。その邪悪な光景を見て何人かの冒険者が怖気づいた。奴らはまだまだまだヒヨッコに違いない。

「どの店も込んでいる様ですなあ」
「今回のレベル測定大会は一般人の見物人も多そうだからね」
レベル測定大会の経済効果は大きそうだ。その利益の何割かを俺に分けたりとかはないのだろうか？

「あの角の店は空いてそうだな」
俺は大通りから少し入った所にあるパスタ屋を指差して言った。神経を集中させて観察したところ、まだまだ空き席はありそうだな。
「んじゃない行くか」

「いらつしゃいまっせ」

店の扉を開けた途端にパートらしきオバちゃんが笑顔で言う。

「あんた達もレベル測定大会に参加するのかい？」

図々しいオバちゃんが気さくに話しかけてくる。駄目だ、人見知りの激しい俺には生きていけそうにない。

「うちの店は冒険者を応援しているから、冒険者にはいつもの半額で食事して貰っているよ」

店を出ようとしていた俺の脚がオバちゃんの台詞で止まる。しようがないな。この店で我慢しよう。

俺達は厨房の近くの席に案内された。ニンニクの香りが胃を刺激する。

俺達はそれぞれ違うメニューを注文して運ばれてくるのを待った。「緊張しているのか？ ブレイブ？」

鼻をヒクヒクさせながらカリューが言う。その滑稽な見た目に思わず笑いそうになった。

「いや、お前のお陰で少し緊張がほぐれたよ」

カリューの頭にクエスチョンマークが浮かんでいるのが見える。

「お待ちどうさま！」

オバちゃんが器用に両手に四皿分のスパゲティを持ってやってきた。俺の注文した海の幸のカルボナーラも美味そうだが、秋留の頼んだカニとタラコのソースパスタも美味そうだ。

「少しあげよつか？」

さぞかし羨ましそうな眼で見ていたのだろうか？ 秋留が自分のパスタを小皿に移してくれた。俺も御礼に小皿に自分のパスタを盛る。

「美味しいな」

カルボナーラも美味しいが、秋留の頼んだソースパスタも美味しい。

「カルボナーラも美味しいよ」

秋留が笑顔で答える。その笑顔が一番綺麗で美味しそうだ。

「お前からカップルみたいだな」

カリューが突然爆弾発言をする。

俺は口に含まれていたパスタをカリューの顔にぶちまけた。普段慌てない秋留も顔を真っ赤にして咳をしている。

「ワシと婆さんが若い頃の事を思い出しますなあ」

ジェットが遠い眼をしている。ジェットの奥さんはジェットが生きていた時に他界している。

「ブレイブ！ テメエはいつもワザとか、それは！ 今朝もドアを俺の高い鼻にブチ当てやがって！」

こうして五月蠅いけど少し幸せな気持ちも出来た食事は幕を下ろした。

『港町ヤード開催 レベル測定大会 開会式』

俺達の目の前の巨大なアーチに大きく文字が書かれている。多目的ホールには冒険者が続々と入っていつているが、一般人は開会式には参加出来ないようだ。

「ここに座ろうぜ」

三席続いて空いている場所にカリューが進む。

と目の前で俺達が座ろうとした席に、真っ白なスーツを身に纏った男が先に腰を掛けた。

俺達が後ろで立ち止まったのに気づいたのか、その男が振り返る。「ああ、すみません。席を取ってしまいましたね。私は移動致しますので……」

俺の服装とは正反対の色をした謎の男はそう言って席を立った。人に全く不安を与えないカリスマ的な声。しかし誠実そうな見た目とは裏腹に俺はコイツに危険な感じを持った。

赤い色の入ったサングラスの向こうではどんな危険な眼をしているのか分かったものではない。

「……………」

俺の服装と顔を見て男が暫く立ち止まった。

「中々良いセンスをしていますね」

感情がこもっている様でこもっていない声で言う。俺にはそれが分かった。

「おお！ 美の女神がこんな所に！」

次に男は秋留の目の前で片足をつけて言った。こいつ俺が言いたくても言えない事をサラリと言いやがって。

しかし秋留は男の台詞に周りをキョロキョロして「どこ？」ととぼけている。

男は諦めたのか俺達から少し離れた別の席に腰を下ろした。

「じゃあ座るか」

カリユーが謎の男の存在など無かったかのように、そのまま席に着いた。

勿論俺は秋留の隣に腰を下ろす。

「さっきのジジイは何だったんだろうな」

見た目は三十歳位だった謎の男の事について秋留に聞く。

「美の女神なんてどこにいるんだらうね」

真面目に言っているのか分からない調子で秋留が答えた。

「一同、静粛に！」

ホールの至る所に設置されている拡声器から、舞台上に立っている初老の男の声が響き渡った。

「あー、これよりレベル測定大会、開会式を始める！」

これから退屈な時間が始まりそうだ。俺は早速両腕を組んで眠る体勢に入った。俺は盗賊としての特技の他に、時と場所を選ばずにすぐに眠りにつけるという特技も持っている。

「……………」

「……………」

『であるからして……。あー、冒険者の皆様にはお詫びと言っては何だが、各職業で取り分け目立つ成績を残した者に、えー、レベル認定友の会から賞金と特別な商品をプレゼントしたいと思う！』

俺の耳にステージで話している偉そうなオッサンの重要な台詞だけ耳に入った。

俺は鋭く眼を開ける。ステージ上には包みに入った数々の商品と『百万カリム』と書かれた大きな作り物の小切手が飾られている。「さすがブレイブ！ 美味しいところではちゃんと起きるんだな」カリューがすかさずツッコんだ。俺の隣で秋留はまだ寝ているが、元盗賊でもある秋留は今のオッサンの台詞をしっかりと聞いている事だろう。

宿屋へと帰る道の途中で、外で待っていたジェットと合流した。

「俺は俄然やる気が出たね！」

俺はジェットに親指を立てる。

「現金な奴だよ、お前は」

「まあ見世物にされるんだから、それくらい当然でしょ」

カリューの台詞に秋留が答える。

明日はレベル測定大会本番だ。今回のレベル測定大会は前半と後半の二日に分かれている。久しぶりに有意義な運動が出来そうだ。

それにしても……。

「何かお祭りが開催されるようですね」

ジェットの言う通り、港町ヤードはお祭りムード満載だ。大通りの左右には色とりどりの簡易テントが張られ何かを焼ける様なコンロが設置されている。

「屋台出るのかな？ 凄く楽しみ！」

秋留はピョンピョンと跳ねて嬉しそうだ。

カリューやジェットも楽しそうに辺りを見渡す。

「いやはや、祭りというのは何歳になっても良いもんですな」

いささか歳の取りすぎたジェットが言った。

翌日。

ここ何日か晴れが続いていたが、今日は空に雲が多く見えた。港

町を吹き抜ける風は少し湿っている。

しかし空模様とは対照的に大通りには沢山の屋台が軒を連ねていた。至る所から良い匂いがしてくる。

「ブレイブは何か食べないの？」

秋留はどこで調達してきたのか、たこ焼きを頬張りながら言った。「中々美味いぜ！」

カリューまで右手にイカ焼き、左手にフランクフルトを持っている。

「沢山食べないと大会で力を出せないぞ」

カリューの台詞に俺は銭袋から硬貨を取り出し、右前方に見えていたお好み焼き屋に向かった。

「すみませんが、お好み焼きを一つ下さい」

俺が言う前に隣の男が出店の主人に言った。全身白い服で身を固めた昨日の胡散臭い男だ！

「おや、昨日の……また先に取ってしまったか？」

「いや、気にするな」

突然話しかけられる事に慣れていない俺は、不機嫌っぷりを見せないように答える。

「え〜っと、名前を伺っていませんでしたね。職業は何ですか？」

仕方なく答えようとした時、続けて男が喋る。

「ああ、すみません。私から自己紹介するのが礼儀ですね」

そこで男は赤いサングラスを直した。

「私の名前はノニオーイ。職業は海賊です」

海賊。

盗賊とほぼ同じ能力を持っているのだが、海賊の職業は船を操る能力に長けている。

アステカ大陸への航路で悪さをしている海賊と名前は同じなのだが、正式に冒険者として活動しているかで異なってくる。それは盗賊でも同じ事が言え、海賊や盗賊は冒険者として活動していても余り良い眼で見られる事はない。

「ブレイブ、盗賊だ」

俺はそれだけ言うと、店の親父に金を払ってお好み焼きを受け取った。

「あの方とはお知り合いなのですかな？」

戻ってきた俺にジェットが聞いてきた。

「昨日、開会式で会ったんだ。ジェットは知ってるのか？」

ノニオーイはジェットが最近見た冒険者クラブという雑誌で紹介されていたらしい。

海賊ノニオーイ、年齢は四十一歳という事だ。実際はもう少し若く見えた。今まで職業に就いていなかったという事だが、アステカ大陸で実施されたレベル測定大会で初めてエントリーし、レベル四十六と認定されたらしい。俺の前回の認定レベルは三十四だったから、レベルは俺より高い事になる。

「頑張つてね、ブレイブ。嘘つき海賊になんか負けるな」

昨日、美の女神を見つけられなかったらしい秋留が俺を励ました。秋留の励ましは全てに勝る。

「観客席から見えていますから、皆さん、頑張ってくださいね！」

残念ながらジェットの励ましは効果が無かった。

レベル測定大会は、昨日のホールではなく町の隣に急遽立てられた特設ステージで行われる。

特設ステージに向かう途中の屋台をほとんど制覇した俺達は気力十分だ。

「グルルルル」

興奮したカリユウが喉を不気味に鳴らす。

「じゃあ、また後でね」

残念ながら、職業毎に集合場所が違つたために秋留とは離れ離れにならなければいけなかった。俺は秋留に手を振りながら集合場所に進んだ。

『盗賊』『海賊』と書かれたプラカードと、そこから少し離れた

所にノニオーイがいるのが見える。

「レッド・ツイスターのブレイブだ」

「わたし、ちょっとファンなんだよねえ」

周りでザワザワと俺の噂話が聞こえる。悪くは無い。

「あ、ノニオーイだぜ」

「彼、紳士だよな。私はノニオーイの方が断然いいわ」

前言撤回。世の盗賊・海賊に俺の力を見せつけてやる。賞金と賞品は俺の物だ。

『えー、まずは職業毎に体力測定を始めて下さい』

拡声器から昨日のオッサンの声が聞こえてくる。さすがにこの広い会場内のどこにいるのかは分からない。

「じゃあ番号と名前呼びますので、順番に前に出て来て下さい」

レベル認定友の会のメンバーらしき人物が声を張り上げる。

「一番、海賊ラムズさん」

どうやら盗賊と海賊は同じ場所でレベル測定を実施するらしい。

ラムズと呼ばれた痩せて気弱そうな男が、冒険者として最低限必要な握力や柔軟性を測定し始める。

観客のために測定結果が会場中央に設置されている巨大な掲示板に表示された。

ラムズの測定結果は……最低だ。本人も恥ずかしそうに顔を赤らめている。これは相当緊張しそうだ。

次々と名前が呼ばれていく中で好成绩を残していく者もいる。

「五十六番、盗賊ブレイブさん」

握力、ジャンプ力はまあまあの成績だ。身体の硬い俺は柔軟性はあまり良くない。それでも会場からはワツと歓声があがる。

「五十七番、海賊ノニオーイさん」

よりにもよって俺の次はあのキザ野郎か。

再び歓声があがった。結果は俺と良い勝負の様だ。握力は奴の方があるが、ジャンプ力は俺の方があがる。

「おおおお！ 何だアイツ！」

戦士の測定会場で歓声があがった。何とかレベル測定大会への参加が許された自称勇者のカリユールが測定しているのだ。

ジャンプ力も握力も桁が違う。今のところ、戦士の中ではダントツトップだ。

「良い仲間をお持ちでございますな」

いつの間にか隣に来ていたノニオーイが言う。近づく気配を感じさせなかったところは、さすがレベル四十六だ。

別の会場では秋留もレベル測定をしているのだろうが、最初の筋力や体力の測定では目立つ事はないだろう。

「全員測定が終わりましたので、次は命中率と集中力の測定を行います！」

係員が再び叫ぶ。次の項目は俺が最も得意とする内容だ。

「では一番の海賊ラムズさんから」

ガチガチに固まったラムズが左手と左足を一緒に出しながら歩いていく。ありゃあプレッシャーに負けたな。

「残念な事ですね。本来の力を出せないとは……。その点、ブレイブさんは大丈夫そうですね」

馴れ馴れしいノニオーイが一部だけ白く染まっている前髪を弄びつつ言った。

その後も本来の実力を出せない人が何人かいたようだが、暫くして再び俺の名前が呼ばれた。

俺は十メートル程離れたマトを睨みつける。

ちなみに命中率の測定では投げる武器は自分である程度選べるし、投げる時の動作でも技術点が付く。

俺は比較的得意な短剣を十本両手に持ち、投げラインに立つ。

「それでは始めて下さい」

係員の指示を受け、俺は集中力と高め再度マトを睨む。

そしてその場で前転や側転、ジャンプをしながら全ての短剣を投げつけた。

「シユタタタン」

俺の投げた短剣は全てマトの中央に突き刺さった。
会場からは歓声上がる。

どこからか「さすがブレイブ、大好き！」という秋留の声が聞こえた気がする。幻聴ではないと思いたい……。

「幻聴ですよ、次は私ですの下がってください」

俺の心の中を読んだノニオーイが前に入ってくる。さすがレベルの高い海賊だ。洞察力は俺よりもあるかもしれない。

ノニオーイも俺と同じ様に短剣を両手に持って構える。

「はっ！」

気合と共に発した声と同時に全ての短剣がマトに突き刺さった。

こいつ、腕の動きが俺より速い！

命中率測定の結果はノニオーイの圧勝だった。同時に短剣を投げ、同時にマトの中央に当てるのはかなりの技術が必要だからだ。俺もそこまでは出来る自信がない。

その後も集中力や反射神経の測定が続き、この測定大会の目玉でもある実践試験となった。

『あー、では本日のメインイベントである実践試験です！』

拡声器から司会と思われる男の声が聞こえる。

盗賊の実践試験は、トラップの沢山ある館に侵入して宝を取って来るという内容だ。

試験の進み具合は、頭がカメラになっているインスペクターという妖精から、中央の巨大スクリーンに映像が映し出されるといいう仕組みらしい。

ちなみに海賊の試験には実際に試験用の船を操るといいう内容もあるようだ。

『えー、まずは武道家の実践試験から始めます！』

武道家の実践試験はレベルの高い武道家と戦うという内容らしい。冒険者クラブでも有名な『ゴッドハンド』の異名を持つ武道家トリカローが姿を現す。その拳は全てを破壊する事が出来ると言われている。

その伝説ともなっているトリカローが相手とあって、武道家達は舞い上がっているようだ。

「結構頑張ったみたいだね」

実践試験の間は他の職業は休憩となるため、俺は秋留の隣まで来て武道家の試験を観戦する事にした。

「あの海賊野郎が中々しぶとくてね」

俺は秋留に答える。

「俺は単独一位だ。ブレイブも秋留もまだまだだな」

呼んでもいないのに自慢の鼻を使って俺達の居場所を探し当てたカリューが、隣で自慢して言った。

俺は盗賊の中では四位、秋留は幻想士の中では二位のようだ。

世の中にはまだまだ上がいる事を実感する。ちなみにノニオーイは海賊の中で三位だ。

「はあっ！」

「やあっ！」

トリカローに正拳突きや回し蹴りを放つ、武道家の気合の入った声が聞こえてくる。

この実践試験ではあくまで武道家の力を測定することである。だからトリカローは反撃する事はない。その強靱な身体で武道家達の攻撃を防いだり避けたりしている。中にはトリカローに攻撃を当てる強者もいる。

「暇だな」

そう言うとかリューはその場で横になりイビキをかいて寝始めた。

俺と秋留はその場に座り込んでサービスの茶を飲む。

ぼけーっと観戦する事一時間。どうやら武道家の実践は終わったようだ。

「続きまして、僧侶の……」

武道家以上に暇になると予想した俺は、カリューを見習って寝る事にした。秋留も座りながらウトウトしている。

どれ位時間が経っただろうか。カリユーの名前が呼ばれる声で俺は眼を覚ました。

「あ、起こそうと思っていたところだよ、いよいよカリユーの番だよ」

寝ぼけ眼で戦士用の闘技場を見る。頑丈な鉄の柵で囲まれた闘技場の中心にカリユーがいた。試験用の装備とロングソードを右手に持っている。

「戦士の実践試験は、ネクロマンサーによる擬似モンスター戦闘だよ」

秋留の説明と同時に鉄の柵の外にいた複数のネクロマンサーらしき男女が、呪文を唱え始めた。

一瞬でカリユーは大小様々なモンスターに囲まれる。

カリユーの興奮している息遣いがここまで聞こえてくるようだ。

『それでは、単独トップの戦士カリユーさんの実践試験を開始して下さい！』

アナウンスの人を若干睨みつけてカリユーが回りのモンスターを斬りつけた。

その剣捌きは力強く荒々しい。しかし的確に敵の急所を突き、次々とゾンビモンスターを切り刻んでいく。

あまりの戦闘の速さに柵の外で呪文を唱えているネクロマンサー達の顔も険しくなる。

「ウオオオオオン！」

カリユーの咆哮が会場中に響き渡る。

「凄いね」

「ああ、相変わらず人間離れしているな」

「ふふっ」

秋留が俺の台詞に小さく笑う。その笑顔がとても素敵だ。

「素敵な笑顔ですね」

いつの間にかやって来たのか、ノニオーイが秋留の顔を覗き込んで言った。俺の台詞を取りやがって！

「貴方も常に笑っているわね」

「え？ ええ、秋留さんを見ているとなぜか笑顔になってしまっ
てすよ」

再び片足をついてノニオーイが言う。俺はネカーとネマーに手を
かけた。

「俺はお前の趣味の悪いサングラス見てると笑顔になっちまっよ」
俺の台詞にノニオーイの笑顔が固まる。

「あはは！」

秋留の笑いを背にノニオーイが立ち去っていった。何となくスツ
キリした俺はカリューに眼を移す。

どうやら既に実践試験が終了したらしい。

「どうだった？」

「人間とは思えない戦いっぷりだったぞ」

俺の嫌味に気づかないカリューは「そうだろ？」と嬉しそうに答
える。

「今日のレベル測定大会はこれで終わりみたいだね」

秋留が伸びをしながら立ち上がる。

「明日は俺と秋留の実践試験があるのかな？」

「え？ 私の実践試験はもう終わったけど？」

秋留が衝撃的な回答をする。

どうやら俺が寝ている間に秋留の実践試験が終わってしまったよ
うだ。

秋留が闘技場に行った時も名前を呼ばれた時も気づかなかった。

まさか俺に変な呪文かけて眠らせていたんじゃ……と疑わしい眼
を秋留に投げかけたが、全然そんな風には見えない。

「私の実践が見れなくて残念だったね、ブレイブ！」

悪戯っぽい笑顔に何も言えないまま、俺達はレベル測定会場を後
にした。

明日はいよいよ最終日だ。

「皆さん、頑張りましたな」

大通りで俺達の帰りを待っていたジェットが言った。やはり自分が参加出来なかった事で少し落ち込んでいるようだ。

「秋留殿の実践は見物でしたな。まさかあそこであんな幻想術を使うとはのお」

俺は無言でジェットを睨む。ジェットは不思議そうな顔をした。

「とりあえず腹が減ったな」

カリユ一の腹が豪快に鳴っているのが聞こえる。

俺達は馴染みの飯屋に入ると適当に空腹を満たして宿屋に戻った。明日はより気合を入れて頑張らないと、賞品を他の奴に持つていかれてしまう。俺は意気込みを新たにし、ベッドに入るとすぐに眠りについた。

「ビョオオオオオオ」

俺は風が唸る音で眼を覚ます。薄暗い部屋の時計の針を確認すると早朝を指していた。

まだ起きるのには少し早いが、俺は今日の実践試験のためにも起きる事にした。

一人装備を整えて宿屋の外に出てみると、予想通りの曇り空。雲は風のように速く流れている。

「ブレイブ、早いじゃん」

気づくと、髪の毛を横で結った秋留が隣にいた。突風でめくれなようにスカートを抑えている。その手は邪魔だろうと思っていると、秋留の背中の中のマントが鋭い爪の形になって俺に近づいた。

「ブラドー、変態ブレイブの事なんてほっときな」

俺の邪まな考えに気づいたのか、秋留が背中で飼っているモンスターのブラッドマントが俺に威嚇してくる。

ブラッドマントはダンジョンの宝箱の中に潜み、モンスターだと知らずに装備してしまっただ冒険者の首を絞めて生き血を吸うという厄介なモンスターだ。

秋留はそのブラッドマントを手なずけ、ブラドーという名前までつけて可愛がっている。

「生憎の天気だね」

「盗賊にとっては晴天よりもある程度曇っていたり、雨が降っていたりの方がやりやすいのさ」

自慢げに腕を組みながら言う。

「ふふ、その調子で実践試験も頑張ってたね」

秋留はそれだけ言うとは宿屋の中に戻っていった。

俺を元気づけるためだけに、わざわざ起きてくれたのだろうか？

「まさかね」

俺は一人呟くと宿屋をブラブラと一周してから部屋に戻った。

『えー、始まりました！ レベル測定大会最終日！ あー、今日はいくつかの職業の実践試験を残すのみとなりました！』

昨日と同じ元気の良いオッサンが司会を務めているようだ。

『えー、本日、天気もあまりよくないようなので、早速始めさせて頂きます！』

うむうむ、良い事だ。オッサンの長い話を聞かされても何も楽しくない。

『あー、まずは盗賊・海賊混合によるトラップハウスへの挑戦を実施してもらいます！』

アナウンスと共に競技場にライトが浴びせられ、一軒の建物が姿を現した。

『えー、このトラップハウスの中に設置されているお宝を無事に取ってくるのが、実践試験の内容となります！』

『えー、進捗状況は一緒に同伴するインスペクターにより中央の巨大モニターに映し出されます！』

アナウンスの説明を聞いて、海賊一番バッターのラムズが早速ビッティングしている。

こうして盗賊・海賊の実践試験が始まった。

いつも通り隣にはノニオーイがいる。

「昨日は良く寝れましたかな？」

「ああ、ぐっすりだ」

早朝に目が覚めてしまった事は勿論言わない。

中央の巨大スクリーンにはラムズの珍道中が映し出されている。

頭に金ダライがぶつかったラムズが映し出され、会場からは笑い声が聞こえた。

「これは恥ずかしい。失敗は許されませんね」

ノニオーイが生唾を飲む。確かにこれはかなりのプレッシャーだ。俺はステージにある商品の山を見て再び闘志を燃やした。

何人かがプレッシャーに負けて醜態をさらすなか、とうとう俺の名前が呼ばれた。

「せいぜい、頑張つて下さいね」

ノニオーイの嫌味な台詞が後ろから聞こえてくる。

トラップの設置場所や内容は毎回変えられるため、先に試験をした人のは参考にはならない。

俺は扉を慎重に調べてからトラップハウスへと進んだ。後ろからはインスペクターがついて来る。

中は薄暗くなっていた。

俺程の盗賊の腕であれば、これくらいの闇は何の問題もない。

足元の突起を慎重にかわす。頭上には金ダライがぶら下がっているのが見える。

「危険だ……」

俺は呟きながら更に廊下を進んだ。

目の前に扉があるのが見える。周りを十分に確認すると、廊下の壁に無数の穴があるのが確認出来た。

「失敗すると穴からケチャップ弾が出てくるんだな……」

先駆者達の中に、全身真っ赤になってこのハウスから出てきた者がいたのを思い出す。

集中しながら扉を調べた。鍵穴の中と扉の隙間に仕掛けがあるの

が見える。

一方、ドアノブには仕掛けはないようだ。

「なるほど」

俺は勢い良くドアノブを捻った。

何も無かったかのように扉が開く。

「この扉には何もしないのが正解だな」

俺はそのまま次の部屋に脚を踏み入れる。

その時、俺は脚の下に不気味な感触を受けた。咄嗟に後方に転がり、廊下に舞い戻る。

前方の壁に液体の弾がぶつかった音がした。

「アブねえ、アブねえ……」

俺は特性ソース弾を避けながら再び前進する。

暫く進むと壁に梯子が設置されているのが見えた。いかにも怪しいがどうするか……。

この実践試験では、係員に渡された盗賊道具しか使用してはいけない。

俺は手渡された道具袋の中から簡易松明を取り出すと、手早く火を付けた。

梯子の上の方を照らすと、巨大な籠がぶら下がっているのが見える。

「トラップを発動させると、あの籠から不気味な物体が降って来そうだな」

俺は道具袋から短剣を取り出すと、梯子と梯子の間の壁に向かって投げつけた。

四本あった短剣を全て壁に投げつける。

俺はその短剣を足場にして梯子代わりに二階に上っていく。勿論使った短剣は取り外しながら進む事を忘れない。

頭上の籠が落ちることなく、無事に二階に辿り着いた。

二階の床には不気味な突起がたくさんついているのが確認出来る。「さてと……」

慎重に周りを見渡すと部屋の隅にタンスがあるのに気づいた。

俺は本能の赴くままにタンスを調べ始める。中には一本のロープと短剣。短剣の先端は釣り針のように鉤爪状になっている。

「なるほど」

発見した短剣にほどけないようにロープを結ぶ。ちなみに盗賊は取れないようなロープの結び方も出来ないといけない。

作成したロープ付き短剣を部屋中央の天井目掛けて勢い良く突き刺す。引っ張っても取れない。

俺はロープ上の方にしがみつき、部屋の反対側へと舞い降りた。

着地と同時に「ガチンツ」という金属音が聞こえた。

俺は着地の勢いを殺さないようにそのまま前転をする。着地した場所に巨大な招き猫の置物が落下して砕け散った。

「おいおい、それは当たったら痛いんじゃない？」

誰かが聞いているはずと思い、大きめに独り言を言う。

「ヒュンツ」

風を切り裂く音を聞いて咄嗟に身体を壁際に寄せる。

俺の目の前を無数の小石が飛んだ。

「次から次へと……」

殺気を感じてもたれていった壁際から離れる。壁が大きく開いた。

どうやら一階へと滑り落ちる罠のようだ。

その間も無数の小石が縦横無尽に飛びかう。

俺は今まで持っていた松明を前方に投げつけた。一瞬、小石を発射している無数の穴が見えた。

その場所を頭に記憶し、持っていた短剣を投げつける。

とりあえず、右端を歩けば小石に当たらなくて済む様にはなった。左端に小石が勢い良く飛ぶ廊下を突き進む。

「むっつ……」

目の前に四桁の数字を入力させるパネル付きの扉が現れた。周りを見渡したがヒントとなるようなメモはない。

「暗号か……俺、苦手なんだよな」

頭を抱えながら独り言を言う。後方にはインスペクターが無言でついてきている。まあ、喋られてもうざいけどな。

俺はモニターの向こうで見守っているであろう秋留を意識して、インスペクターのカメラを見つめた。

「ん？」

俺はインスペクターの腹の部分に何か書かれているのに気づいた。近づこうとすると一定の距離を保とうとしてインスペクターが離れる。

俺は視力に全神経を集中させた。

『扉は魔を封じた』

インスペクターの腹にはそう書かれている。

魔を封じた扉？ 恐らく目の前の扉の事を言っているのだろう。

うーん……。

……。

……。

……。

魔というのは、魔族の事だろうか。魔族を封じる？ 何か聞いた

事あるな。

確かジェットが活躍したのが第三次封魔大戦だったな。あれは、二九九九年だったよなあ。第一次とか二次の事は全然知らないし。

俺は試しに数字のパネルに二九九九と入力してみた。「カチャッ」という音と共に目の前の扉が開く。

「ゴイ〜ンッ」

脳天に金ドライが直撃した。目の前に星が舞う。

扉は開いたけど、罾が作動した……半分正解だったという事か？俺はクラクラする頭を抱えながら部屋の奥に進む。外の会場ではさぞかし笑われている事だろう。ちくしょう！

目の前にある机の上に立派な短剣が三本並んでいる。

『一番、価値のあると思われる短剣を選んで、出口へと進め』

盗賊に必要なものに鑑定眼というものがある。俺はそれが苦手だ。

物の良し悪しが分からない。

俺は順番に短剣を手に持って見比べる。

一番、装飾が豪華な短剣を右手に持つと『出口』と書かれた扉に手をかけた。

「!!!」

俺は空気の動きを察知して後方にジャンプする。目の前に金ダライが落ちた。

「最期まで危険なトラップハウスだったな」

俺は金ダライを跨いで、トラップハウスの外へと出た。

会場からは拍手の嵐。「金ダライ当たった時の顔が面白かったぞ〜!」という野次も聞こえてくる。俺は遠く離れた観客席でそう叫んでいたオツサンの顔を覚えた。盗賊の視力を舐めるなよ。

俺は最期に持ってきた短剣とトラップハウスに入るときに受け取った道具袋を返す。

「この短剣は見た目だけ立派なんですけど、価値はそんなにないんですよ。残念でしたな」

係員は残念そうに言う。俺はもっと残念だ。

「いやあ、惜しかったですね。金ダライに当たらなければ結構高得点を狙えそうでしたのに」

近づいてきたノニオーイがまたしても嫌味を言う。

暫くして、トラップの作り変えが終了し、ノニオーイがトラップハウスに侵入していった。

その映像が中央のモニターに表示される。

さすがにレベルが高いだけあって動きに無駄がない。俺がトラップを作動させて何とか避けたりしているのに対してノニオーイはトラップの発動自体させていなかった。

悔しいがコイツは中々手強い。と目の前でノニオーイが地面に落ちていたバナナの皮でツルリと滑った。会場から様々な笑いが上がる。俺も思わず笑顔になってしまった。

恥ずかしそうに頭を支えながら映像の中のノニオーイが立ち上が

る。

その後は海賊特有の船の操縦などのテスト項目もあったが、手際のいい操縦で見てる者を驚かせていた。殆ど何の失敗もなく最期の短剣が一番価値のある短剣を選んだようだ。

バナナの皮で滑ったせいかわ、ノニオーイは俺の方には来ずに離れた所に腰を下ろした。いい気味だ。

その後何人かの海賊や盗賊がトラップハウスに挑み、現在トップの盗賊ロシファがトラップハウスに挑んだ。盗賊の間では流水ロシファと呼ばれている凄腕だ。俺も何度かロシファによって盗られた後の宝箱に泣かされた事がある。

映像に写されたロシファは正に流れる水のようにだった。畏には全くかからず動きにも無駄がない。時折インスペクターに視線を投げかけて観客へのアピールも忘れない。

『えー、では、盗賊・海賊の全ての方の実践試験が終わりました！』
昼前になった頃、ようやく盗賊・海賊の実践試験が終わった。

俺は秋留を探して隣に座る。反対側にはカリューも座っているが相手にはしない。

「お疲れ様、ブレイブ。惜しかったね」

「まあ、しょうがないさ。流水ロシファの試験を見せられると何も言えないや」

「修行が足りないな！」

落ち込んでいる俺に対して容赦なくカリューが言う。いつか恥じかかせてやるからな、コイツ！

こうして俺達のレベル測定大会は終わった。

カリューは戦士レベル五七で戦士の中ではトップ、秋留は幻想士レベル三八、俺は盗賊レベル三六だった。全員レベルはアップしていたが、カリューの上がり方が尋常ではない。

カリューは見事、レベル測定大会の戦士の部で優勝した。

賞金百万カリムを受け取り、風神の守りという首にぶら下げている。

るだけで魔法攻撃を弱めるというアイテムを副賞として貰っていた。今はカリユーが賞金で俺達に飯を奢ってくれている。

ここは焼肉屋・上々苑の一室。俺は遠慮する事なく特上ロースを食べていた。

「お前ら遠慮しないよな」

カリユーが俺達の食いつぷりを見て呷く。

俺も秋留もジェットも、ここぞとばかりに高級な肉を食べまくっている。

安物とは違い口に入れた途端に肉はとろけ、旨みが口いっぱいに広がった。

「臨時収入なんだから気にしない」

秋留も珍しく沢山食べているようだ。実は幻想土の中で優勝出来なかった事が悔しかったのかもしれない。

「まあ、いいけどよ。この獣人化しているお陰で優勝出来たところもあるだろうし。これは俺の本来の力じゃねえや」

カリユーもガツガツと白飯と肉を食べている。どうやら獣人化のせいでパワーアップしている事は気づいているらしい。

「レベル五七は凄いですな。ワシは五二だったんですぞ、魔族の軍団長を倒した時は……」

ジェットが酒を飲みながら昔話を始める。

俺達はその後も楽しく気兼ねなく食事をして宿屋に帰った。

第二章 依頼

「もう海の幸は食べ飽きたんだ！」

フォークに刺したイカフライを弄びつつ、カリューがまたしても文句を言っている。

「レベル測定大会は終わったものの……、船がない事には変わりがないからのお」

ジェットが食後のお茶を飲み干す。

レベル測定大会から三日が経過した。俺達はレベル測定大会前の退屈な日々に戻りしていた。

「さすがに暇だよな」

冷静な秋留にも若干焦りの色が見える。

アステカ大陸までの航路に出現する海賊は相当手強いらしい。船乗り達はいよいよ俺達をアステカ大陸まで運ぶ事を嫌がるようになってしまった。

しかもレベル測定大会最終日から続く悪天候。今、店屋の外は大荒れに荒れている。

その時ドカドカと俺達のテーブルに近づいてくる複数の人影があった。

フード付きのマントに全身を覆った三人組みだ。

「ちょっとよろしいでしょうか？」

真ん中に立っていたのは男だと思っていたのだが、どうやら女性だったようだ。

雨に塗れたフードを外すと眉毛がキリリとした強気な女性の顔が現れた。歳は三十位だろうか。

「何事ですか？」

俺達の保護者役のジェットが向きを代えて女性に聞く。

「レベル測定大会、拝見させて頂きました」

レベル測定大会に参加していないジェットは、少し申し訳無さそ

うにうつむいた。

「さすがはレッド・ツイスターと言ったところでしょうか……」

「俺達を褒めに来てくれたのか？」

先程からピリピリしている獣人のカリューが迫力満点な口で言う。普通の女性なら卒倒してしまいそうな迫力だが、目の前の女性は臆する様子を微塵も見せない。

「では、早速本題に入りましょう。空いてる席に座ってもいいかしら？」

カリューとジェットの間空いている席に女性が座る。お供の二人がその後ろに立った。

「まずは自己紹介から。わたくしの名前はイザベラ。武具屋を営んでいます」

イザベラと名乗った女性は後方の二人の方を振り返り自己紹介を続ける。

「左が主人のリー、右が用心棒のクログローです」

イザベラの自己紹介を受けて背の高い男がフードを外す。亜細李^{アシリ}大陸の物と思われる衣装を着こなす温和そうな眼をした男だ。真っ黒な髪を後ろで小さく縛っている。眼の間にあるホクロが目立った。

ちなみに秋留は亜細李大陸出身だったりする。

「知り合い？」

俺は小さく秋留に聞いてみた。

「亜細李大陸が他の大陸に比べて小さいからって、そう簡単に知り合いに会ったりしないよ！」

秋留が口を膨らませて反論した。俺に馬鹿にされた事が分かったらしい。

「老人と若造ばかりのパーティーが役に立つんですかい？」

クログローと紹介された黒色人種の男がダミ声でムカツク事を言う。危うくネカーとネマーを構えそうになった。

「口を慎みなさい！ クログロー！」

何事の反論も許さない口調でイザベラがクログローに言う。

「申し訳ございません、イザベラ様……」

体格の良いクログローが小さくなった。いい気味だ。

「で、武具屋の主人が私達に何のようですか？」

俺達パーティーの中で頭の回転がズバ抜けて良く、交渉事に強い秋留が答える。

交渉役が秋留だと気づいたイザベラが目の前秋留に視線を投げた。その眼で俺達を値踏みしているようだ。

「巷で聞いた噂なのですが、皆様、アステカ大陸に向かいたいとか……」

秋留は何も答えない。イザベラが一息置いて続ける。

「実は私達もアステカ大陸に急いで行かなければならない理由があります」

「……商売ね。大量の武器や防具をアステカ大陸に届けたい。それにはこの港町でいつまでも足止めを食ってる訳にはいかないと聞いたところかな？」

イザベラの説明に秋留が間髪あけずに答えた。

イザベラは小さく微笑み、更に話を続ける。

「そこまで分かっていらつしやるなら、この先の話も分かって頂けるかしら？」

「アステカ大陸行き船にタダで乗せてあげる代わりに貴方達の護衛をしろと？」

「その通りでございます……」

そこまで話すと向かい合った二人の視線が激しく交差し始めた。

盗賊の俺の眼になら火花が見える……気がする。

……少し息苦しくなってきた。

いつまで睨み合っているつもりだろう。リーと呼ばれたイザベラの夫にも焦りが見える。

「仮に護衛に失敗した場合は？」

「その場で船を降りてもらおうかしら？」

沈黙を破った秋留の台詞に鬼のような応答をイザベラが笑顔で返す。

「ふふ、楽しそうだね」

「ええ、今の時期なら十分に泳げますよ」

尚も女同士の熾烈な戦いは続く。

しかし俺の予想を裏切り、秋留が笑顔で続けた。

「任せて！ イザベラさん達の事は私達の命に代えても守ってみせるよ」

『え？』

周りで事の成り行きを見守っていた男達（店員や他の客を含む）が一斉に間抜けな声を挙げた。

今の会話のやりとりで、二人の女性はどうして円満解決な顔をしていられるのだろうか？

「頼りにしてるわよ、レッド・ツイスターの皆さん」

イザベラが俺達の顔を見渡しながら言う。その言葉に対して思わず苦笑いで返す。

「さて、話はまとまりましたが、こちらから提案させてもらいたい事があります」

紅茶を一杯飲んでイザベラが言った。次は何を言われるのかドキドキしてしまう。

「先程クログローが言った言葉、全く考えていないという訳ではありません」

俺が露骨にムカついた「役に立つのか」という台詞だろう。それ以外には奴は何も喋っていない。

「明日の朝九時、文芸堂という劇場の前でお待ちしています」

そう言うといザベラとお供の二人は席を立った。その手には俺達の昼食の伝票を握っている。

「ではまた明日……」

再び三人はフードを被ると店を出て行った。

会計を済ませる時に「領収書を……武有夢商会で……」という言葉

葉は聞き逃さなかった。さすが商人は一味違う。俺以上に金に関してはうるさそうだ。

『……………』

一同、暫しの沈黙。

「ふふ、結局タダで船に乗れるんだからオツケーでしょ」

秋留が嬉しそうに言う。

確かに話の内容的には俺達に不利な気がしたが、払う予定だった船代を払わずに済んだのは確かだ。

「カリューも悪い海賊とかモンスターが襲ってきたら、正義の名の下に切り伏せちゃってね」

「正義…………。おう！任せろ！」

今まで放心状態だったカリューがガッツポーズで答える。こいつは単純で良いな。

「ブレイブもオツケーだよな？」

「勿論！余計な金を払わずに済んで良かったな。船に乗って何かに襲われれば戦うのは当たり前だしな」

例え異論があつたとしても、そんな可愛い顔で「オツケーだよな？」と言われれば頷くしかない。

「ワシも勿論、秋留殿に文句などないですぞ」

秋留の下僕であるジェットはお茶をズズズと飲んだ。

翌朝もヤードは荒れていた。この時期特有の台風が近づいてきているらしい。宿屋の目の前の通りは葉や紙くずが散らかっている。

朝早くから掃除をしている元気なオバちゃんの姿も見える。

「いつになったら晴れるのかのお」

顔に張りついた紙切れを、律儀に近くのゴミ箱に捨ててジェットが言った。

「とにかく、やっとこの大陸ともオサラバ出来そうぞ何よりだ」

カリューがデカイ口で豪快に笑う。朝早くから近所迷惑な奴だ。

俺達はイザベラに指定された文芸堂という劇場目指して、人気も

まばらな大通りを歩き始めた。

向かい風で少し歩きにくかったが、俺達は予定の三十分前に文芸堂の前の広場に到着した。

広場のベンチに思いがけない奴が座っているのに気づく。

「おや、盗賊ブレイブさんとその仲間達じゃないですか」

趣味の悪いサングラスを直しつつ、海賊ノニオーイが近づいてきた。

レベル測定大会の時と同様に白いスーツに身を包んでいる。

ノニオーイの周りに個性豊かな顔ぶれが集まって来た。同じパーティーのメンバーだろうか？

「あら？ お知り合いだったの？」

俺達の後ろからイザベラが近づいてきて言った。その左右には昨日と同じようにリーとクログローが控えている。

イザベラ達は文芸堂の前に立って俺達の方を振り返った。今気づいたのだが、リーとクログローの肩には妖精インスペクターが数匹乗っかっている。

「お知り合いでも関係はありません。これから貴方達二つのパーティーに勝負をしてもらいます」

単刀直入にイザベラが言う。

「へっ！ こんなシヨボイ奴らと勝負しろだど〜？」

少し離れた場所にある石垣に座っていた男がイザベラの言葉に反応する。緑色の服に身を包んだ男はタバコをくわえた口から煙を吐き出した。

緑色の帽子を被り右目は真っ白い髪で隠れていて見えないが、左目にはスコープの様な物を装備している。職業は銃士だろうか。

「おい！ ガロン！ そんな事を言ったら失礼だろう！」

魚屋のようなゴムのツナギを穿いた男が注意する。あいつはどこかで見た事あるぞ。

「ラムズは真面目過ぎるんだ。だからレベル測定大会で恥ずかしい結果になるんだぞ」

どこかで見た事ある顔だと思ったらトップバッターの海賊ラムズだったか。まさかノニオーイのパーティーのメンバーだったとは……。

「こらこら、仲良くしろ！」

ノニオーイが間に割って入る。サングラスの向こう側でノニオーイの力強い視線を感じた。

「なかなか楽しそうなパーティーだな」

俺は皮肉を込めて言ったがノニオーイは動じない。

「役者が揃ったところで早速説明させてもらおうかしら」

イザベラが一步前が出る。お付の二人もそれに続いた。

「これから一人ひとりにインスペクターを渡します」

イザベラの説明と共にお付の二人がそれぞれのパーティーのメンバーにインスペクターを一匹ずつ渡す。

あれ？ 向こうのパーティーのインスペクターが一匹多いぞ。

「！ なんだ、そいつは？」

カリユがノニオーイに向かって指をさす。いや、正確にはノニオーイの真後ろだ。

「拙者、染次郎そめじろうと申す。以後、お見知りおきを」

ノニオーイの後ろから声が聞こえたが、気配だけで姿は見えない。

「こいつは気にするな。イザベラさん、説明を続けてください」

無口な染次郎に代わって、目立ちたがり屋のノニオーイが先を促す。

冷静なイザベラは暫く固まっていたが、気を取り直して再び説明し始めた。

「これから互いのパーティーに、内容の異なる紙を一枚渡します……」

イザベラの説明によると、要するに俺達にこの港町を舞台にした宝探しゲームをしるという事らしかった。

最終的に辿り着く宝のありかは互いのパーティーで同じらしい。相手のパーティーの邪魔をするのも自由という事だった。その説

明を聞いた時のノニオーイ達の憎たらしい顔は忘れられない。ちなみに同じタイミングで秋留が小悪魔の様な顔をしたのは気のせいだろうか。

「おほん！……それでは……」

イザベラの説明が終わると、後ろで控えていたクログローが前へ一歩出て言った。

「依頼争奪！ パーティーバトル！ スター……ート！」

「炎の精霊イフリートよ……」

秋留は突然、イザベラから受け取った宝探しの紙を俺の懐に押し込むと呪文を唱え始めた。

と同時に俺は背後からの殺気を感じて体勢を低くする。

目の前の地面に手裏剣が突き刺さった。

「ほほう、やりますな」

声はするけど姿は見せない。

「邪魔するのはオツケーだけど、殺したりするのは勿論駄目だよ！」

イザベラが少し不安そうに叫ぶ。

「大丈夫でござるよ。手裏剣に当たったくらいでは死んだりせんよ。相変わらず姿の見せない染次郎が言う。死なないだろうけど当たったら痛いぞ。」

「炎の弾丸で敵を撃ち抜け！ ファイヤーバレット！」

秋留が呪文の詠唱を終え、ノニオーイの方へ魔法と放つ。

しかし魔法はノニオーイの後方にいるラムズにぶち当たる。

「！ 狙いはメモか！」

確かにイザベラからの宝探しメモはラムズが受け取っていた。ノニオーイがうるたえて叫んだが既にラムズは黒焦げに……。

「だ、駄目だったみたい」

秋留が肩を落とす。殺すつもりだったのか？

ラムズの方に眼を移すと、ラムズを守る様に亀の甲羅が……。俺達の頭の上にクエスチオンマークが現れる。

「海で知り合った亀のモンスターのタートル。……俺の友達なんだ」
ラムズは亀のモンスターから顔を出して言った。こいつ獣使いか！
しかしよりによってタートルとは……。俺の人間の知り合いでタ
コのタコールというのがある。あまり良いネーミングセンスとは言
えない。

「ブレイブ！ 置いてくよ！」

気づくと俺以外のメンバーは文芸堂の前の通りから細い路地に入
る所だった。

俺はノニオーイ達を睨み付けると秋留達を追って走り始めた。

「メモを焼き尽くしちゃう作戦は失敗だね」

秋留が走りながら言う。

『邪魔をするのも自由』と聞いた時の秋留の小悪魔のような顔は
見間違いではなかったようだ。

「それで、こつちのメモはどんな内容なんだ？」

「自分で持つてるでしょ？」

秋留が言う。

そういえば、秋留が魔法を唱える前に俺の懐にメモを突っ込んで
いたな。

俺は走りながら折りたたんであったメモを開く。

『三枚の貝』

短っ！

俺は心配になって秋留の方を振り向く。

「もうメモの内容は見たし場所は検討がついたよ」

さすが我がパーティーの頭脳。

メモの内容を見る暇も無かったような気がしたが……。俺は羨望
の眼差しで秋留を見る。

「何か匂うぞ」

カリューが鼻をヒクヒクさせながら言った。秋留に見とれていて、
うつかりしていたが確かに油の匂いがする。

「散るんだ！」

秋留を抱きかかえて俺は叫んだ。後方から炎が吹き上がった。

「おお~~~~」

素早さのあまりない老人のジェットが燃える。

カリューが野生の勘なのか、路地の両壁を蹴りながら建物の屋根に上る。

その時俺は前方に気配を感じて秋留を壁側に押し出した。俺と秋留の間に再び手裏剣が空を裂く音がした。

「また避けられた」

前方の路地の影から再び染次郎が姿を現して呟く。

「しかも燃える仲間をほつとくとは……残忍な……」

あまり火力は強くなかったのだろう。後方ではジェットが煙を上げながらピクピクしている。だが放っておけばジェットは勝手に回復する。

染次郎の気配が再び消えた。

俺達は気を取り直して再び走り始める。煙を上げながらジェットも後を追ってきている。

「何で屋根に上ったんだ？」

染次郎が襲ってきた時に咄嗟に建物の屋根に上ったカリューが言う。

「野生の勘だ」

カリューの回答に思わず噴出しそうになる。

俺は心の中で「アホか」と呟くと、再び染次郎からの攻撃を警戒して辺りを観察し始めた。

「ノニオーイのパーティーは役割分担がしっかりしていそうだね」

秋留が言う。

俺達は今まで数々の依頼をこなしてきた。しかし今回のように邪魔者がいたり謎解きがメインだったりしたのは事がない。

ノニオーイ達のパーティーはこういう依頼を多くこなしているのだろうか？

「……ノニオーイ達がどの辺にいるか分かる？」

秋留の問いに俺は神経を張り巡らせる範囲を広げた。

暫く走りながら広範囲で辺りに注意を払ったが何も気配を感じない。まあ、奴ら海賊パーティーだから気配とか消すのは苦手じゃないはず……。

「やっぱり駄目そうかあ。こつちも偵察隊を出したいんだけどね」

秋留の言う偵察隊とは妨害実行隊みたいなものだろう。秋留の事を心から敵に回したくないと思う。

「つと、この辺のはずだよ」

秋留が路地の中心で突然立ち止まる。周りを見渡すと何やら少し見覚えのある感じ……。

上を見上げるとシエル・シエル・シエルの看板が屋根に取り付けであった。

そうか。

ここは以前、黒猫の獣人に襲われた時に逃げ込んだ路地だ。俺はその時にあの看板を打ち落としたはずだ。

「三枚の貝……でしょ？」

秋留が可愛らしく言った。確かにシエルとは貝の事だが、一体どこに次のメモがあるのだろう。

俺は建物の屋根に上って近くで三枚の貝の看板を観察する。

看板の裏側に回ると手紙が貼り付けられているのに気づいた。

板から手紙をはがした瞬間、またしても御馴染みの気配を察知して、俺は建物の屋根から路地に音を立てずに飛び降りる。

俺の軌跡を追うように屋根や壁に炎が上がった。

カリューやジェットが周りを窺いながら身構える。今度はカリユ

ーは野生の勘で飛び出したりはしないようだ。

「また……」

染次郎の落ち着いた声が頭上から聞こえた。カリューが柱や壁を使つて器用に屋根に上る。

「避けられた……」

今度は後ろから声が発せられる。こいつ何者だ！

「我が忍びの動きについて来れるとは……」

染次郎が俺達の目の前に出現した。カリユーが屋根の上から染次郎に向かって飛び蹴りを繰り返す。

蹴りが当たった染次郎の身体が路地の壁にぶち当たった。

「うぐっ！」

カリユーの後ろから染次郎が出現し、カリユーの首を絞める。先程カリユーが蹴り飛ばしたのは、人間大の丸太だ……。いつの間に……。

「ガルウツ！」

カリユーが染次郎の腕を掴んでそのまま染次郎を投げ飛ばす。

その動きはさすがに染次郎も予測していなかったのか、地面に思いつきり背中を打ちつけた。

染次郎はそのまま転がり、俺達から少し離れた場所で振り向く。

「きゅ、急所を絞めていたのだが……デタラメな身体の作りをして
おる……」

そう言うつと煙と共に染次郎は再び姿を消した。

「む〜〜〜！ あいつ邪魔〜〜〜！」

秋留はカンシヤクを起こす寸前のようだ。

それでも冷静に俺から次のメモを受け取り内容を読み上げた。

『太陽と大地の間の逆上する水』

暫く考え込む秋留。

俺やカリユーは考えようとしめない。ジェットは少し疲れたのか、背中のリュックから水筒を取り出しお茶を飲み始めた。

「あんた達、少しは考えようとしてよね！」

秋留は少し膨れて言うつと来た道を戻り始めた。

「何だ？ 何か分かったのか？」

少し申し訳無さそうに俺は聞いた。

「太陽と大地……この二種類がある物つて何か思いつかない？」

秋留が得意気に説明し始める。俺達は少し考えたが何も出てこない。

「はあ〜……。教会だよ、教会」
なるほど。

確かに教会には太陽神を崇めるラーズ教と、大地を創造したと言われるガイア神を崇めるガイア教がある。

その間の逆上する水に次のメモがあるという事か！ ……逆上する水？

「逆上する水がよく分からないから、この町の地図をすぐ近くにあった案内板で確認するの」

俺の疑問を察知したのか秋留が答えてくれた。

俺達はすぐに案内板の前に来た。小さな広場になっているため、近くには俺達が何をしているのか知らない一般人の姿も見える。

「この港町にはそれぞれの教会が二つずつあるみたいだね」

基本的にあまり教会には縁が無い俺達冒険者は、教会の場所をあまり知らなかったりする。

「それぞれの間にある物で逆上する水を意味するようなものは……」
秋留が案内板の地図を指でなぞって考え込む。俺達も注意されたばかりなので、真剣に考えるフリをする。

「あつた！ ここの銭湯！ 水が逆上して熱くなってお湯になる！」
秋留が嬉しさのあまり大声で叫ぶ。

その時、俺達の後方で再び御馴染みの気配が。咄嗟に俺はネカーとネマーを構えて後ろを振り向く。それにつられて仲間達も後方を振り返る。

「なるほど……銭湯か……悪いが先回りさせてもらおう」

俺がネカーの引き金を引いた時は既に遅かった。誰もいなくなつた広場の石畳に硬貨が転がる。

「い、急ごう！ 奴の事だから次のメモを焼き尽くすつもりだぞ！」
俺は叫んでから銭湯に走り出そうとした。

「ふふふ〜」

秋留が不気味に笑う。染次郎の相次ぐ妨害のせいで、とうとうキレてしまったのだろうか。

「銭湯は、ウ・ソ！」

秋留が可愛く微笑みながら言う。その笑顔に飛び込みたい。

「邪魔次郎が近くにいて、次のメモを焼き尽くしてやろうと考えていると思っただからね」

俺達は改めて秋留の頭脳に関心する。しかも邪魔次郎とは良いネーミングだ。

「確かに逆上する水の説明として銭湯は悪くないけどね」

秋留が走り始めるのを見て俺達は後を追う。

「銭湯は教会の間じゃないの。邪魔次郎がもう少し細かく観察すれば気づいたはずなんだけどね」

「じゃあ間にあるのは何なんだ？」

カリューがワクワクして聞く。このゲームを楽しんでいるようだ。しかし勝負に負けたら人間に戻るための船に乗れなくなるかもしれない、という事を忘れているんじゃないだろうか。

「噴水」

秋留が言う。確かに噴水は水が下から上に舞い上がる。正に逆上という訳か……。

俺達は邪魔次郎の妨害に会わずに無事に目的の噴水に着いた。

噴水の中央の女神像の左手にメモが挟まっているのが見える。その女神像はまるで秋留のようだ。

「くだらない事考えてなくて良いから早く取ってきて！」

秋留が俺の考えを見抜いたかのようにズバリと言う。

俺は噴水の水で濡れないように器用に女神像の左手からメモを抜き取る。

「そろそろ最期のメモじゃないかな？」

手渡したメモを秋留が開く。

『兵共が夢の跡』

またしても短い文章だ。これだけで秋留は次の場所が分かるのだろうか。

「やっぱりね」

まるで予想していたかのように秋留は呟くと再び走り始めた。

「次はどこなんだ？」

カリューに先を越されないように俺は素早く聞いた。

「最近まで沢山の人が争っていた場所は？」

秋留が俺に聞いてくる。

最近まで争っていた場所？ 戦闘していた場所だろうか？

「レベル測定大会の会場だよ！ 急ぐよ！」

そうか。ってさつきから納得してばかりの自分が少し情けなくなる。

最近まで冒険者達が争っていた場所。

正に兵共が夢の跡だ。

「何でインスペクターを渡されたかを考えてたんだよね」

走りながら秋留が推理モードになっていく。

「でイザベラは立派な商人っていう事を考えると……」

目の前の突き当たりを右に曲がる。レベル測定会場だった場所はこの先だ。

「レベル測定大会の会場をそのまま壊すには勿体無い。何かに使えないか……」

秋留はまるでイザベラになったかのように考え始める。

「そ、それじゃあ！」

俺は最悪のシナリオを思い浮かべて叫んだ。

「良い見世物になったようだね」

レベル測定会場にゲートが見える。

ゲートには『生中継・冒険者達の戦い』と大きく書かれている。

その下には『入場料千カリム』とある。秋留の予想通り俺達は見世物にされたようだ。今更文句も言えない。

「ガールルルル」

カリューもようやく気づいたのか自分の肩に乗っているインスペクターに対して唸った。それじゃあファンサービス以外の何物でもないぞ。客が喜ぶだけだ。

『ワアアアア』

会場から一斉に歓声上がる。客入りは上々の様だ。会場の中央にはモニターがメンバーの数分設置されていて、俺の顔もドアップで映し出されている。

俺達が会場に入ったすぐ後に再び歓声が沸きあがる。

後ろを少し確認するとノニオーイ達のパーティーが入ってきたところだった。

「染次郎の奴め……失敗したか！」

俺達の後方を走るノニオーイが呟いたのが聞こえた。

「タ、タートル！」

ラムズは亀のモンスターに合図を送る。タートルは凄いい勢いで俺達の前に立ちはだかった。そしてその小さな口から大量の水を吐き出す。

俺達は勢い良く流れてきた水で足元をすくわれた。ついでに後ろを走っていたノニオーイ達の足もすくう。何をやっているんだ……

「ラムズ！ 落ち着け！」

体勢を立て直してノニオーイが叫ぶ。

「こ、こんなに人がいて落ち着けるかあ〜」

ラムズは極端なあがり症のようだ。この観客がいなければ十分な力が発揮出来るのだろう。勿論レベル測定大会の時も。

その時、あまり存在感のなかったガロンと呼ばれていた男が、手に持っていた銃を音を立てて伸ばした。

「危ない！」

俺は最優先に秋留の身体を押し倒す。

ガロンの持っていた銃から弾丸が飛び出した。俺と秋留の頭上を複数の弾が通り過ぎる。こいつ、ぶっ放しやがった！

「痛えぞ！」

弾の当たったカリユーが頭を支えながらガロンに飛び掛る。

普通弾が当たったら「痛い」じゃ済まないはずですけど……。

「やっぱり石弾じゃあ威力はあんまりないか〜」

ガロンがタバコの煙をフッフッと吐き出す。石弾？ 石の弾丸ということだろうか。

カリューがガロンに拳を繰り出す。その攻撃をガロンは銃身で防ぐ。

「お主等、騙したな……」

「しつこい！」

秋留が振り向き様に持っていた杖を振り回す。その攻撃が見事に顔面にヒットした。

「あれ？ 当たっちゃった……」

その場に染次郎は倒れた。

「馬鹿野郎！ 先にお宝取っちゃえばこっちの勝ちだったのに！」

ノニオーイが猛ダツシュしながら近づいてくる。

カリューとガロンは激しい攻防を繰り広げている。カリューの攻撃をギリギリでかわしているところを見ると、ガロンも相当の腕に違いない。

俺達も負けないように会場中央に設置されている宝箱目指して走り始めた。しかしノニオーイの方が俺達より素早さが上のようだ。

ジェットが振り返ってノニオーイを迎え撃つ。

「とわあつ！」

ジェットがレイピアを鞘に入れながら振り回す。その攻撃をノニオーイは難なくかわしてジェットに足払いを仕掛ける。ジェットが難なく倒された。

「舐めるなよお！」

ノニオーイは叫ぶと大きく踏み込んだ。俺達の頭上をノニオーイの身体が通り過ぎる。俺は宙を舞うノニオーイの白い上着を、咄嗟に右手で掴んで思いつきり地面に叩き付けた。

「ぐふっ」

ノニオーイから声が漏れる。

俺は更にノニオーイを踏みつけながら宝箱に向かってダツシュした。秋留もそのまま走り続けている。

「あ……」

秋留が目の前を見て小さく声をあげた。それにつられて俺も前方の宝箱を見る。

そこには宝箱を開けているタコール……いやタートルがいた。

「か、勝ちかな？」

後ろからタートルを操っているラムズのオドオドした声が聞こえた。あがり症に負けた……。

「皆さん、お疲れ様でした」

首謀者のイザベラが現れた。その顔はショーが上手くいった事から喜んでいるようだ。

ここはレベル測定会場の隣に設置された小さなテントの中。

あの後クログローとリーから観客に対しての終了の説明がされ、見世物はお開きとなった。

「よくも見世物にしてくれたな！」

結局、ガロンとの決着もつかないままに強制的にテントに連れて来られたカリューが文句を言っている。

少し離れた所でガロン自身も不満そうにタバコを吸っている。

「見世物にしない、とは言っていないでしょう？」

イザベラが言った。確かにその通りだ。俺達では何も言い返せない。救いの眼を秋留に向けたが、秋留は勝負に負けた事が悔しくてそれどころではないようだ。

「ふっふっふ。結局勝ったのは俺達だったな」

ノニオーイが自信たっぷりと言う。俺達はあがり症のラムズに負けたのだ。ある意味、ノニオーイに負けるよりショックが大きい。

「それでは依頼はノニオーイさん達にお願いする、という事でいいかしらね？」

それを聞いてカリューが真っ白になった。勝負に負けるイコール船に乗れない、という事を今更思い出したようだ。

「……と言いたんだけどね」

イザベラが話しを続ける。

「依頼は両パーティーにお願いするわ」

『え〜〜』

イザベラ以外のテントにいる全員が驚く。

「おいおい！ 俺は納得しないぞ！ 何のために勝負したと思っ
ているんだ！」

ノニオーイがイザベラに近づいて睨みつける。

しかし強気なイザベラは全く臆することもなく言い放つ。

「どちらかのパーティーを雇う、とは言ってません。それに勝負の
内容を見て、両パーティーの実力は素晴らしいものと分かりました
ので」

それを聞くとノニオーイは黙って後ろに下がった。勿論、すれ違
い様に俺達を睨む事を忘れてはいはいない。

「時間がないので早速、明日の早朝に出航したいと思います」

冒険者はいつ何が起こるか分からないから、いつでも出発できる
準備はしてある。

「既に荷物は詰め込み終わっています。船や荷物を海に棲むモン
スターや危険な海賊から守るのが、貴方達の仕事です」

イザベラが簡単に説明する。

「それでは明日からお願いますね」

一方的に話すとイザベラ達はテントから出て行った。

残ったいがみ合う二つのパーティーも自分達の宿に戻り始める。

外の会場は既に解体作業が始まっていた。

第三章 船出

台風が近づいてきているという噂は本当だったようだ。

翌朝も海は大荒れに荒れていた。日ごとに天候は悪くなっているようだ。

しかし港で待っていたイザベラは出航を延期しようとは考えていない。

「武具の納期が迫っているの。これ以上遅れたら商売にならなくなってしまうわ」

イザベラは力強く言った。この辺に商人という職業の凄さを感じる。

「ちなみにお前らは船酔いとかしないのか？」

近くで出航準備を手伝っていたガロンが聞いてきた。俺達は船の事は分からないため、近くで作業を見物している。

「うるせえ！ 自分の仕事をしてろ！」

カリューがガロンに向かって唸る。実はカリューは船に弱いのだ。以前、俺達がパーティーを組んだゴールドウィツシュ大陸から船に乗った事があるのだが、その時カリューは酷い船酔いに襲われていた。

「まあ、この荒れ方じゃあ、船酔いするとかしないとかはあんまり関係ないかもしれないけどなあ」

ガロンが意地悪く言って立ち去った。

確かにこんな状態での船旅はした事がない。俺は人生経験豊富なジェットを見た。

「さすがにワシもここまで荒れた海を旅した事はないのお」

ほとんどの大陸を制覇しているジェットが答えた。

「ぼおおおおお」と目の前の船の煙突から煙が吹き上げる。

俺達が乗る船はちょっとしたダンスパーティーが開けるくらいの

大きさだ。船底の方にある倉庫に沢山の武具が積み込まれているらしい。後でイザベラから詳しい説明があるはずだが……。

ちなみに船乗り達の話の盗み聞いたところによると、この船は魔動船という種類らしい。動力部に積んだ魔力を込めた石と蒸気の力により動いているという事だ。

こういつた魔力や蒸気を乗り物や武器に応用する技術は、魔族の本拠地があるとされているワグレスク大陸から伝わってきたものだ。「そろそろ出発するわよ」

イザベラが強風で乱れる髪を押さえながら近づいてきた。

その隣にはリーとクログローがいる。そしてイザベラの腕には小さな子供が抱きかかえられている。

「息子のリュウよ」

俺達の疑問に答えるようにイザベラが言う。リュウと紹介された子供は小さくお辞儀をした。その大きな目で俺達を観察している。

「危険な旅に連れて行くのはどうなのか、と何度も言われた事があるんだけどね。私自身が小さい頃に一人ぼっちの日々を送っていたから、この子には寂しい思いをさせたくないのよ」

今まで力強かったイザベラが突然優しい口調になった。

「安心して下さい。ご家族全員の命は何としてでも守りますから」秋留がリュウに微笑みかけながら言った。その微笑を俺に対してもして欲しいものだ。

その後、イザベラから船の説明があった。

待機する場所や荷物の場所、そして重要なイザベラ達がいる部屋。俺達はその場所を頭に叩き込んで、船と港をつなぐ木製の橋を渡った。海が相当荒れているため、港に止まっている船でも十分に揺れる。カリューは具合の悪そうな顔を始めた。

「しゅっぱ〜〜〜〜っつっ！」

船長と思われる黒いヒゲの男が叫ぶ。

船員達の手によって船と港をつなぐ橋が外され、船のイカリが巻き上げられた。

重い音を立てつつ静かに船が動き始めた。あまりの強風で帆は張っていないが、それでも動くというのが魔動船の特徴だろう。

頭上を見上げるとメインマストの見張り台にガロンがいる。

そして船長の隣にはノニオーイ、船尾の椅子にラムズが座っている。染次郎は……どこかにいるのだろう。

「そ、外にいるのは危険だ……部屋に入ろう……」

いつもの迫力が全くない感じでカリユウが言った。

俺達は哀れみの眼でカリユウを見ると頷いて部屋に入ってしまった。

部屋の中も外と変わらずに危険だった。

あまりの船の揺れっぷりに物は落ちるはカリユウは転がるは大変だ。船酔いのしない俺達も早くも体力を消耗し始めてしまった。

俺は気分転換に再び甲板に出ることにした。

「待つて。私も行くよ」

少し顔が青ざめてきた秋留が俺についてくる。いつもクールな秋留もさすがに少し辛そうだ。

死人であるジェットは、カリユウがこれ以上転がらないように面倒を見ている。

甲板は強風にプラスして横殴りの雨も降ってきていた。

「そっちのロープ引つ張れ」

「水もつとかき出せ！」

船員達が忙しく働いている。ノニオーイ達のパーティーもそれぞれの仕事をこなしているようだ。俺達はあくまで対モンスターや海賊相手。出番が来るまでは暇だ。

「こんな所に出てきたら危ないぞ」

クログローが俺達の後ろから声を掛ける。少し前から気配には気づいていたが無視をしていた。

「あんたは危なくないのか？」

俺は嫌味を込めて言い返す。

「俺は元獵師だからな。これくらいの時化じゃあビクともしない」

確かに獵師にピッタリな見た目だ。真つ黒な肌に筋骨隆々とした身体。そして腰にさしたロッド……？

「元獵師？ クログローさんは職業は何なの？」

秋留が聞く。

「クログローと呼んでくれて結構だぞ。俺はガイア教の司祭だ」

『え〜！』

俺と秋留は息もピッタリに叫ぶ。さすが将来のオシドリ夫婦だ。

「何だ？ 司祭には見えないか？」

『見えない』

再び声を合わせて言う。

俺達は暫くクログローと話した後、更に海が荒れてきたので近くのロープを自分の身体のベルトに取り付けた。秋留も同じく身体にロープを取り付ける。

「こうしておけば、最悪荒れた海に投げ出される事はなくなる」

クログローが親切に教えてくれた。案外こいつは良い奴かもしれない。

嵐の音に負けないほどの派手な音を立てて、一際大きな波が上がった。

いや、波じゃない！

「秋留！」

目の前から突然現れたイルカ五頭程の大きさの魚モンスターが、俺達の乗る船に体当たりを仕掛けてきた。

小さく船が揺れる。

俺はバランスを保ちながらネカーとネマーで魚モンスターを撃つ。しかし波に阻まれて弾の威力が落ちているらしく、モンスターの硬い鱗を少し傷つける程度だ。

「スプラッシュサンダー！」

呪文の詠唱を終えた秋留が叫ぶ。

上空に出現した黒雲から魚モンスター目掛けて稲妻が走る。

「びびや〜」

不気味な叫び声を上げて魚モンスターの身体が硬直する。そのまま魚モンスターは息絶え海底へと沈んでいった。

「さすがですね」

いつの間にか後ろにはノニオーイがいた。この大きく揺れる船の上で何事もないかのように直立している。

「海のモンスターには雷系の魔法が絶大な威力を發揮しますからねえ」

ノニオーイがイヤらしい眼つきで雨や海水に濡れた秋留の身体を凝視する。俺はさりげなく秋留の前に立ち視界を防いだ。

「ふっ。この船にはシャワー室もあるらしいぞ。海に慣れていない奴はすぐに風邪を引くからな。暖かくする事だな……」

またしてもムカツク事を言ってノニオーイは去っていった。

「まあ口は悪いが……奴の操船技術は実際大したもんだったぞ」

隣で黙って事の成り行きを見守っていたクログローが言った。確かにレベル測定大会の時はそれなりな操船技術を披露していたようだが……。

決してノニオーイの忠告を聞いた訳ではないが、船の揺れも激しくなってきたので、カリユールがくたばっているであろう船室へと戻る事にした。

「酷い揺れですなあ……」

顔を真っ青にして前より幾分かゲツソリしたように見えるカリユールの隣で、これまた色白い顔を更に青白くしたジェットが言う。

「いい加減、この天気は何とかして欲しいよね」

秋留も少し気持ち悪そうだ。ちなみに俺は先程トイレに行っただけで放してきたところだ。外が見える小さいガラス窓に映る自分の顔も相当青い。

「こ、これじゃあ襲われた時にまともに戦えないよな」

俺は深呼吸をしながら言った。

「何かあった時に戦えないんじゃないや困るからね。皆で少し横になろう」

か

秋留は何とか冷静さを保っているようだ。

俺達（と言ってもカリューは返事出来る状態ではないが）は秋留の意見に賛成すると、簡易ベッドに横になった。

幾分静かになった波の音が聞こえてくる。船の揺れも少しおさまったようだ。向かいのベッドに寝ていたはずの秋留とジェット姿がない。

ちなみにカリューは俺の下のベッドで相変わらずくたばっている。船室から甲板に上がる階段を上り、鉄製の重い扉を開ける。

外は少し明るい。空に広がる暗雲の隙間から光が漏れているのが確認出来た。

「予想通りにへばっていたようだな」

ロープの束を持って通り過ぎ様にガロンが言った。あいつら俺達の事を馬鹿にしていたに違いない。まあ予想通りへばってましたけどね。

船の先端に近いベンチに秋留とジェットが座っているのが見えた。一緒に仲良くお茶を飲んでいる。

俺は黙って秋留の隣に腰を下ろす。

「おはよう、ブレイブ。体調はどう？」

早速、秋留から優しく語りかけられて一気に元気が出てきた。

「絶好調！」

俺はガッツポーズで答える。秋留が「フッフ」と可愛く笑った。

「何とか嵐は越えたようですよ」

この船の船長が俺達の所へ来て言った。船長らしい日に焼けた黒い顔にモジャモジャの黒いヒゲを生やしている。右足は義足だ。

自己紹介された時に聞いた話だと、豪快に転んだ結果義足になっ
てしまったらしい。一体、どんな転び方をしたのだろうか。

「後、何日くらいでアステカ大陸に到着しそうですか？」

「まあ二週間でしょうな」

秋留の質問に船長があっさりと答える。そ、そんなに体力持つかな……。

「がっはっは。心配すんな。途中の小さな島で色々補給とかするかな」

俺達の不安げな顔を見て船長が言う。

それを聞いて俺達は心からホツとした。カリューもさすがに二週間経ったらミイラになっているかもしれない。

ふと誰が操船をしているのかと後方を見た。舵を握っているのはノニオーイだ。

俺の目線に気づいたのかヒゲモジャ船長（名前は忘れた）が説明し始める。

「ノニオーイは良い腕を持っているよ。お陰で俺は楽が出来る」

ガロンは依然としてメインマストの見張り台にいる。船尾にいたラムズはいない。染次郎は相変わらず一度も見かけないが船には乗っている事だろう。

その時、見張り台にいたガロンが大声で叫んだ。

「黒い船が見えるぞ〜！」

俺達もガロンが見ている船首の方向を見つめた。確かに水平線上に黒い帆を張った黒い船が見える。あまり良い見た目とは言えないが……。

「ありゃあ噂の海賊船だぞ〜！」

ヒゲモジャ船長が近くの金属の筒に向かって叫ぶ。この筒は船の至る所と繋がっていて声を伝える事が出来る。

船長がノニオーイの場所に走った。

俺達も海賊船からの攻撃を警戒して船首へと進む。とりあえず距離が大分あるため、まだ攻撃は仕掛けてこないようだ。

「魔動力を上げる！ 海賊船から離れるんだ！」

船長が叫ぶ。

ノニオーイは巧みに舵を操り、帆で風を受けて船のスピードを上げているようだ。まだ少し海が荒れているせいで、再び船が大きく

揺れ出す。

「このままだと追いつかれるぞ」

見張り台からガロンが言った。いつの間にかラムズも甲板に出てきて帆の向きを操るロープを握っている。

既に黒い海賊船は誰の眼にも確認出来る程近づいてきていた。

しかも先程は一隻しか見えていなかったが、海賊船は三隻いた！そのうちの一隻の正面に設置されている大砲が少し動いたのに気づいた。

「おい！ 大砲で撃ってくるぞ！」

「分かつてる！ ちよつと黙ってる！」

ノニオーイは俺が忠告する前に既に気づいていたらしく、舵を勢い良く右に操る。

船のすぐ横で海賊船から発射された弾が海面に当たって水しぶきが上がった。ノニオーイは海賊船の方を確認しながら舵を操る。

「こちら也大砲の準備だ！ 急げ！」

船長が叫ぶ。

どうやら海賊船の大砲の方が性能が言いようだ。こちらの大砲ではもう少し海賊船に近づかないと飛距離が足りないらしい。

大砲？

俺は秋留の方を振り向く。俺達パーティーの頭脳であり遠距離攻撃が得意な大砲の存在を忘れていた。

「女性に対して大砲は失礼だけどね！」

秋留が俺の心の中を読み取って少し怒る。

秋留はそのまま呪文の詠唱を始めた。

「業火の身体を持ち……」

再びすぐ傍で水しぶきが上がった。それでも秋留の集中力は途切れていないようだ。

「煉獄の心を抱く者よ、烈火の眼差しを知らぬ哀れな者達を汝の瞳で貫け……」

秋留が呪文の詠唱を終えた瞬間、船が今まで以上に大きく傾いた。

「コロナレーザー！」

身体のバランスを崩しながらも秋留は呪文を放った。いつもは命中力の良い秋留だがさすがに今の揺れでは照準が合わなかったらしく、迫ってきていた海賊船の帆を貫いただけだった。

「むう！ もう少しマシな操船して欲しいもんだよね」

呪文の反動で尻餅をついた秋留が文句を言う。可愛い御尻をさすりながら起き上がった。

秋留はノニオーイの方を睨んだが、全然気づいていないようだ。暫くしてこちらの船からも大砲による攻撃が開始された。

しかし船の揺れのせいで、なかなか海賊船をとらえることが出来ない。

見かねた船長が途中でノニオーイと操船を変ったが、既に海賊船は俺達の攻撃の射程外へと離れていた。

「す、すみません……。野蛮な海賊船と戦うのに慣れてなくて……。ノニオーイは汗をかきながらヒゲモジャ船長に謝っている。

あいつは見た目ばかりで実践経験はほとんどないに違いない。

「いやいや、一発も攻撃を食らわなかったのは凄い技術だぞ！」

船長が豪快に笑う。

とりあえず俺達は海賊船の攻撃を退けたのだ。

「やむやむ……」

すっかり海も穏やかになったが空にはまだ暗雲が広がっている。

それでも辺りは少し明るくなった。

隣ではカリユーが久しぶりの外の新鮮な空気を吸っている。顔はまだまだ青い。

「船は嫌いだ」

カリユーは最低限の言葉で今の気持ちを伝えた。あの海の荒れ方ではカリユーじゃなくても船を嫌いになりそうだ。

少し離れた所にカモメの群れが飛んでいる。確かカモメの群れがいる所には魚がいると聞いたことがあるぞ。

水しぶきを上げてカモメの群れの下から巨大な影が飛び出た。モンスターか？

「いやあ、大漁！ 大漁！」

片手にモリを持った魚人……いや、ラムズが海の中から現れた。モリには魚が四匹突き刺さっている。安全とは言えない海であいつは何をやっているんだか……。

そのラムズが船の縄梯子を上って来た。後ろからは亀のモンスターがついて来ている。

「お！ カリューさんでしたっけ？ 体調はもう大丈夫ですか？」
船員から手渡されたタオルで頭や身体を拭きながらカリューに話し掛けた。漁師の格好をしていたためあまり気づかなかったが、ラムズは肉付きの良い身体をしている。やはりあがり症でなければ手強い奴に違いない。

「元氣そうだな……」

ラムズの質問にカリューが答える。その眼は何か羨ましそうだ。「俺は海賊の職業に就いてはいるけど、普段は漁をして生活しているからなあ。海は慣れてるし、あれくらいの時化じゃあビクともしないよ」

拭き終わったタオルを近くの籠に放り込む。

「元氣の出る魚料理を作ってやるよ」

そう言うところラムズは船室に下りていった。

「羨ましいですな」

ジェットがポツリと言う。俺達は無言で頷いた。

暫くは何事もなく航海が進んだ。天気も次第に良くなって来ていた。

時折、魚型のモンスターや鳥型のモンスターが襲ってきたが、難なく撃退していった。ガロンは手に持っていた銃でモンスターを何匹か撃ち落す。どうやらあの銃はショットガンのようなようだ。一度に何発もの弾を発射する事が出来るタイプの銃だが、細かな標的は狙えないし飛距離もない。近距離向きだな。

一方、ノニオーイは器用にナイフでモンスターを倒している。その腕は正に百発百中だ。身体中に何本のナイフを装備しているのか疑問にもなるが……。

「あいつらも結構やるよね」

近づいてきていたモンスターを魔法で丸焦げにしてから秋留が言った。「も」と言うところが秋留らしい。

少し離れた所では少しフラつきながらもカリユーが業火の剣で敵を切り倒していく。

俺も適当に硬貨を節約しつつ、近づいてきたモンスターだけを倒す。

「それにしても……」

ジェットが空飛ぶ魚を三枚におろして言う。海のモンスターには詳しくないため名前は全然分からない。

「モンスターが少し増えてきましたなあ」

次々と襲い掛かってくる魚だか鳥だか分からないモンスターを切り刻む。

確かにモンスターが増えてきている。

「時化の後は餌を求めて獣が凶暴になるだよ」

後方のマストの影に隠れてサーベルを振り回している船員その一が言った。

お前は誰だ。

俺は変な喋り方の船員は放っておく事にした。

そうして時折襲ってくるモンスターを倒しているうちに、何日かが経過した。

港を出てから一週間くらいは経ったのだろうか？

今はすっかり日が落ち、甲板の上では松明が光っている。

俺達は食堂に降りて夕食を取っていた。働いている船員もいるので夕食を取る時間はバラバラだが、俺達は船での仕事はないため一緒に食事を取っている。

「今日は港を出て何日目だ？」

ほとんどの時間、ベッドで死んでいるカリューがスープを飲み干して聞く。

「五日目だよ」

秋留が答える。そうか、まだ五日しか経ってないのか……。先はまだまだ長そうだ。

「魚介類を食べ続けてどれくらい経ったんだろうなあ……」

カリューが遠い眼をする。

港町ヤードで足止めを食っていたのを含めて一ヶ月は経過している。しかしカリューの問いには答えない。手負いの狼と会話するのは危険だ。

「後どれくらいでアステカ大陸に着くのかなあ……」

以前、船長の聞いた時は二週間くらいで着くと言っていた。後一週間以上はあるだろう。まあ、途中で補給のために島に立ち寄るみたいなお事を言っていたが……。

「はあゝあ」

カリューが深いため息をつく。

辛いのはお前だけじゃないぞ、と声を大にして言いたいが、さすがにカリューの不幸さを考えると文句は言いづらい。

俺達は食事を終えると船室に戻った。今日も疲れた……。

暫くベッドに横になってウトウトしていると突然大きな揺れが船全体を襲った。

「何じゃ？」

ジェットが飛び起きる。続いて秋留も眼を擦りながら杖を握った。カリューは起きない。

俺達三人は甲板に駆け上がった。

いつもは夜は襲われなかったのに、今日に限って何が起きたのだろうか？

俺達は甲板に飛び出した。至る所で船員達が倒れている。

「遅えなあ！」

ノニオーイが甲板の少し高い位置から叫ぶ。

その隣にガロンとラムズが武器を構えて暗闇を睨んでいる。

「もつと灯りいる？」

秋留の叫びにノニオーイが頷いた。

「光の精霊レムよ、我が前にその姿を現し、全ての影を滅せよ……
ブライトネス！」

秋留の杖から小さな光の玉が飛び出したかと思うと、上空で大きく輝く。

目の前には……真っ赤で巨大なタコが姿を現した。タコール……
とうとうそんな姿に……。

「ブレイブ！ 変な事考えてないで戦闘だよ！」

気づくと俺以外のメンバーは姿があらわになったタコ目掛けて攻撃を開始しようとしていた。俺もネカーとネマーを構えて目の前のタコ目掛けて走り出そうとする。

その時、海の中から川にかかる橋のように太いタコの足が飛び出してきた。その足が走り出した俺達を薙ぎ払おうとする。

それなりにレベルの高い俺達はその攻撃を難なくかわす。

「バキッ」

しかし、俺達への攻撃を外れたタコ足が船の甲板を破壊した。

「避けるな！ 足を一本ずつ減らすんだ！」

遠くで舵を握り始めたノニオーイが無茶な事を言う。その隣では船長が銃を片手にタコ足に応戦している。

巨大なタコに船自体を捕まえられているが、ノニオーイは何とか体勢を立て直そうとしているようだ。

「南から強めの風が吹いてるぞ！ 帆を全開に張れ！」

ノニオーイがまだ意識のある船員達に叫ぶ。

「お前らは足だ！ まずは足を狙え！」

ノニオーイの命令というところが気に食わないが、俺達は船にガツシリと吸盤で張り付いているタコ足に攻撃を開始した。

走りながら俺はネカーとネマーを構えた。ジェットと秋留はそれ

ぞれ別のタコ足へ向かっている。あくまでタコだから、足は八本だろうか。

目の前に海から飛び出したタコ足が見える。

俺は連続でトリガを引く。

「おわっ！」

ネカーとネマーから発射された硬貨が弾力のあるタコ足に弾かれて俺の方へ襲ってきた。

俺は間一髪で自爆を避けた。さすがに自爆は情けない。

「ファイヤーバレット！」

後方で秋留の叫び声が聞こえてきた。

この豊かな弾力でも秋留の炎の魔法の前には無力だろう。秋留の攻撃により香ばしい良い匂いがしてきた。

「ぐ~~~~」

思わず腹が鳴ってしまった。魚介類は食い飽きるほど食べたはずなのに……。

「へっ」

俺の耳にはノニオーイの憎らしい笑い声が聞こえてきた。

あいつも海賊なら俺の腹の音が聞こえていてもおかしくはない。

いつか見返してやるぞ……。

「うっ！」

周りに気を取られているうちに、いつの間にかタコ足の一撃を食らってしまった。一瞬息が止まる。

俺は背負っている鞆に手をつ込んだ。

鞆の中身は戦いやすいように綺麗に詰め込まれている。俺は手探りで必要なアイテムを取り出すとネカーの銃身に取り出したアイテムを擦りつけた。

俺が取り出したアイテムは小さな爆弾だ。俺はタコ足に向かって爆弾を投げつける。

一瞬の間、後、巨大な爆発が発生した。

その衝撃でタコも驚いて船から少し遠ざかる。

「てめえ！ 少しは使用する道具を考えやがれ！」
爆発の衝撃で大きく揺れる船を器用に持ち直してノニオーイが叫ぶ。

確かに予想以上の威力だ。

忘れていたが、この爆弾は以前どこぞのオヤジから購入した、見た目はシヨボイが威力は絶大の爆弾だった。

少し離れたタコに対してすかさず船から大砲が発射される。

ノニオーイの操船によって照準がつけやすくなっているようだ。

出来るなら初めからやれよ、と心の中で思う。

大砲の爆発によってタコの頭からは真っ黒な墨のような血のようなものが飛び出す。

タコは赤い顔を更に赤くして反撃しようとしている。

その時、いつの間に入ったのかタコの頭の上に人影が見えた。

「染次郎！」

今までどこにいたのか染次郎がタコの頭の上に姿を現した。

染次郎は持っていた刀をタコの頭に突き立てる。あのヌルヌルして弾力のある皮膚の上に立ち刀を突き立てるとは、やはり染次郎は実力は並じゃない。

しかし深く刺さってはいるが、染次郎の刀はタコの分厚い皮膚を少し傷つけただけのようなのだ。

「はっ！」

染次郎は気合を発し、手に持っていた鉄球を天高く投げつけた。

その鉄球は鎖で先程の刀とつながっている。

空を覆う黒い雲から鉄球に向かって轟音と共に一筋の雷が落ちた。雷から発生した電撃が鎖を伝わりタコの身体を襲う。

「ぎよわあああんっ」

タコが不気味な呻き声をあげた。

まだ残っている三本のタコ足で頭上の染次郎を払い落とそうとする。

しかし染次郎は既に頭の上にはいない。モンスターごときの素早

さでは染次郎の動きを捉えることは不可能だろう。

「染次郎もいることだし、私はちよつとイザベラさんの様子を見てくるよ」

秋留は俺とジェットを残し船室へと消えていった。

俺も秋留と一緒にいこうとしたところをジェットに呼び止められる。

「頑張りますぞ！ ブレイブ殿」

ジェットはレイピアを構える。

ジェットの装備しているレイピアは魔力を込める事が出来る特別製だ。実は秋留から貰ったものだ。先程もジェットはマジックレイピアに魔力を込めてタコ足の一本を吹っ飛ばしていた。

色々ダメージを受けたタコが激しく暴れ始める。

ノニオーイが巧みな操船技術でタコの攻撃をかわすが、何度か攻撃を受けて船が大きく揺れた。

ガロンがショットガンを構えてタコ足の前に躍り出る。

ショットガンが火を噴きタコ足が吹っ飛ぶ。残り二本。いっちょ前に生命の危機を感じたのかタコが船から離れ一度海中に潜る。

しばしの静寂。

「ドンッ」

船が突然縦に揺れた。どうやらタコ頭で船底を叩いているようだ。脳みそがない訳ではないらしい。

「何とかならないのか？」

俺は揺れる船から振り落とされないように手すりにしがみつく。

ノニオーイが鉄の筒に向かって叫ぶ。

「ラムズ！ 船底砲の準備は良いか？」

「準備完了。照準もバッチリだ！」

筒の中からくぐもったラムズの声が聞こえた。船底砲？

「発射！」

ノニオーイの号令の後、船全体が大きく揺れた。海が一瞬荒れる。大型の船になると、海中の敵用に船底に特別な大砲を持つてるの

もあるんだよ」

無知な俺に対してノニオーイが勝ち誇ったように言う。

「それより、そろそろタコ野郎が飛び出してくるぞ！」

「火力は任せる！」

俺は鞆から再び小型の爆弾を取り出すと、海面を睨みつつ構えた。隣ではジェットもマジックレイピアに魔力を込めつつ構える。

水しぶきが大量に巻き上がり、勢い良くタコが飛び出した。視界が一瞬塞がる。

俺は水しぶきの隙間から注意深くタコを観察した。

頭には血管が浮かび、更に赤みを帯びている。まだ爆弾を投げる事は出来ない！

「ぶしゃああああ」

巨大タコの突き出た口から真っ黒な墨が飛び散った。これが有名なタコ墨か！

俺は慎重にタコ墨の飛沫を避ける。

ちなみに墨の量も身体に合わせて大量なため、飛沫といっても一人分位の大きさはある。

「のわあ！」

素早さのあまりないジェットがモロに飛沫を浴び、その身体が真っ黒になった。

俺はタコの正面に向かい走り出した。タコの口目掛けて爆弾を投げつけるためだ。

左方からはガロンがショットガンを構えて飛び出す。負けてたまるか！

タコの左目が突然燃え上がる。その傍には染次郎の姿が一瞬見えた。何か技を繰り出したに違いないが、あまりしつかりは見えなかった。

続いて右目に向かってガロンが至近距離でショットガンをぶっ放す。

タコは両目を失い、再び墨を吐こうとしているのか息を大きく吸

い込む。

俺はその動作に合わせて爆弾を投げつけた。

爆弾を飲み込んだタコの動きが一瞬止まる。

「ポンッ」とまるで遠くで爆発音がした様な小さな音。

しかし、その音と共にタコの身体が一瞬二倍位に膨らんだ。

沈黙。

そのまま巨大なタコモンスターは倒れ海を漂う漂流物と化した。

こいつの死体がどこかの大陸に流れ着いたりしたら、さぞかし大事になることだろう。

「ブレイブ殿、どこですかな」

ジェットの助けを求める声と、何か海に落ちる音が聞こえたのはほぼ同時だった。

真っ黒な身体を綺麗にしたかったんだろう……。

第四章 復讐

「ぶえつくしよい！」
優しそうな見た目とは裏腹にジェットが鬼のようなクシャミをする。

これでまともに戦えるパーティーのメンバーは、俺と秋留だけになってしまったという事か。

ここは船の医務室だ。目の前には見た目が海賊と全く変わらない船医がいる。顔中がヒゲで覆われているように見える。

「うつつ……」

巨大タコとの戦闘で船が何度か揺れ、再び激しい船酔いに襲われたカリューが顔を青くして唸った。

「風邪と船酔いだな。薬渡すからとりあえず飲んどけ」

思いやりの欠片も見せない船医が、棚から適当な薬を取り出してジェットとカリューに渡す。

俺達は医務室を出ると、自分達の寢床に戻ってきた。

「ゾンビも風邪を引くんだな」

俺はボソツと呟いた。

俺はジェットと出会うまではゾンビという種族について全く理解していなかった。

まるで生身の人間のように食事をして睡眠を取る。そしてこうして病気にもかかる……。

もしかしたら、ジェットが特別なのもかもしれない。

いや、特別なのはジェットを死人として復活させた秋留の力の方なのかもしれない。

そのジェットは氷枕に頭を乗つけて眠っている。

っていうか、熱とかあんのか？

「何となく、早く治りそうじゃん？」

俺の心を読んで秋留が言った。

そういえば、俺は心が読まれやすいのだろうか。自分では全く自覚はない。

「顔に出やすいんだよね、ブレイブは」
またしても俺の心を読んだ秋留が言う。最早、言葉がいらなくな
りつつある。

こんなに簡単に顔に出てしまつては、盗賊という職業を少し考え直さないといけないか……。

「また少し荒れだしたかな？」

秋留が小さな窓から外を眺めながら言った。確かに船の揺れが激しくなつてきたようだ。

ベッドで寝ている船揺れ探知機も苦しんでいる。

「風邪とかうつりそうだし、居心地悪いからまた甲板に出ないか？」
秋留が周りを見渡して頷く。

「確かにちよつと危険なウイルスとか混ざつてるかも」

秋留がジェットを見てから足早に船室の扉を開けた。

いい加減、波の音も聞き飽きた。はじめは波の音は落ち着いて良
い感じだと思つていた自分が憎い。

「どんな感じですか？」

近づいてきた船長に秋留が聞く。

船長がここに歩いてくるという事は、今船を操っているのはノニ
オーイという事だろう。

「船の損傷が少し激しくてなあ……直しつつ進んでいるが、なにぶ
ん負傷した船員も多くて……」

少し疲れ気味に船長が答える。

巨大タコの襲撃は想像以上に船全体にダメージを与えたようだ。

今思えば、我らがパーティーの半分は巨大タコの襲撃とは関係の
ないところで痛手を負っているように思えて情けない。

「何か手伝える事があるなら協力しますよ」

秋留が余計な事を言う。

まあ、今の船の状況を考える限り冒険者の俺達がノンビリしている訳にもいかないだろう。

そろそろ食料が少なくなってきたという事を聞いて、俺達は二人で釣りをする事になった。俺達に出来るのはそれくらいなのだろう。「釣れないね」

釣りを始めて三分後に秋留が言う。さすがにそんなに早くは釣れないんじゃないかな、と言おうとした矢先、秋留の竿が大きくしなる。

「おお！ 早速来たああああ！」

秋留が勢い良く竿を引く。その先には人間の子供程の大きさもある虹色の魚が引っかかっている。

「お！ レインボーフィッシュじゃないか。珍しい魚で背びれが特に旨いんだよ」

近くで作業をしていた船員が網を操り、針に掛かった魚を器用に捕獲しながら言った。

それを聞いて秋留も自慢そうに連れた魚を見た。しかし魚自体には触れないようだ。船員が網の中で暴れる魚を近くの生簀に放り込んだ。

「さ〜って、続きだ続きだ」

嬉しそうに秋留は再び釣りを始める。

あゝ、何か秋留とデートしてるみたいで幸せだ。

それから暫く釣りを続けていたが俺は全く釣れず。秋留はあの後、十六匹もの魚を釣り上げた。

「そろそろ引き上げようか？」

秋留が伸びをしながら言った。

その時、今まで沈黙を保っていた俺の釣竿が大きくしなった。今にも折れそうだ。

「うおおおお！」

俺は思いつきり竿を引く。海面へと流れている糸が左へ右へと大きく振られた。

「ブレイブ！ 頑張れ！」

十分な釣果を上げた秋留が隣で応援してくれる。ここで男を見せる時が来たようだ。

俺は盗賊の能力を最大限に生かし全身で海中の魚の動きを捉えようとしたり。

糸の振動が身体全体に伝わってくる。

ここだ！

俺は思いつきり竿を引っ張った。手ごたえは十分だ。

ざ。ば。ば。……。

俺の釣糸の先には巨大なタコの口が引っかかっていた。その両目は潰れている。

俺は先日倒したあの巨大タコの死骸を釣り上げてしまったようだ。隣では秋留が大笑いしている……。

「ぷ。ぷ。ぷ。」

俺の耳にはノニオーイ達が遠くで笑っている声も聞こえた。

「まあ食えるんじゃないのか？」

レインボーフィッシュの事を教えてくれた船員が言った。

数少ない船員達は巨大タコモンスターの死骸をタコの大きさに負けない程の大きな網で引き上げる。

夕食はタコづくしになるのだろうか。

「いったただつきまゝす」

その日の夕食。

俺達のテーブルの上には今まで以上に海の幸が並んでいる。

特に秋留が釣り上げたレインボーフィッシュの背びれの煮付けの味は格別だった。口の中でとろける感触がたまらない。

「今日はやたらとタコ料理が多いなあ」

カリューがタコ焼きを口に頬張りながら愚痴る。熱そうにハフハ

フしている。

「身がプリプリしていて美味しいですな」

ジェットがタコのマリネに舌鼓を打つ。

カリユもジェットも今食べているタコ料理が巨大タコモンスターだという事実は知らない。

俺もタコ飯を食べた。意外に美味しい。

「後どれくらいで島に着くんだろうな」

カリユの頭に血管がピクピクしているのが見える。そろそろ限界に達しない。

「後二、三日つてところらしいよ」

俺達の後ろから、久しぶりのイザベラ軍団が登場する。

さすがに全員、顔色はあまり良くない。

その中でイザベラが抱いている子供は顔色も良くスヤスヤと寝息を立てていた。

「後少しの辛抱だ。頑張れよ」

クログローがぶっきらぼうに答える。やはりあまり好きになれない。

そのクログローは左腕を怪我したらしく白い布で腕を吊っている。俺の視線に気付いたのかクログローは恥ずかしそうに言った。

「大きく船が揺れた時に倒れちまってな……情けない……」

いつもならここぞとばかりに嫌味を言っただが、情けなさで言ったら俺達のパーティーも負けていないため、つつこまない事にした。

「色々頑張ってもらっているみたいで感謝するわ」

イザベラ達のテーブルにも料理が運ばれてきた。タコづくしに少し顔が引きつったように見える。

「リユウ君も静かに寝ているみたいですね」

俺には見せない笑顔で秋留がリユウに語りかけた。思わず嫉妬した眼でリユウを睨んだ自分を戒める。

「何やってんだ？」

自分の頭をポカポカ殴っているとカリユーに止められた。目の前では秋留が俺のやっていた事を理解していたかのように白い眼で見つめている。

「はあ〜……」

秋留がため息をつく。いや、ため息つかれると少し傷つくぞ……。俺達はイザベラ達と適当に話しをすると、一日を終えるため自分達の部屋へと帰った。

「じゃ、俺は寝る……」

最近めつきり体力の無くなったカリユーがベッドに倒れこむ。

「へ〜つくしよい！」

ジェットも鼻をかみながらベッドに横になった。

その額に秋留が濡れタオルを乗せる。俺も病気になったら秋留に看病してもらえるのだろうか。

「すまんのぉ……」

ジェットが秋留に言う。

この光景を見ていると、昔の物語にあるような「金がないなら娘は貰っていくぜ〜げっへっへ〜」という展開を想像せずにはいられない。

「はあ〜」

俺と秋留は暫くお互いのベッドに横になっていたが、秋留のため息がまたしても聞こえた。俺、何かしたか？「げっへっへ〜」とか考えていたのがバレたか？

「どうした？」

他の死んでる奴らを起こさないように小声でさりげなく聞いた。

「今、戦闘になったら少し危ないかもね」

秋留も小声で答える。

確かに秋留の言う通りだ。俺達だけではなく負傷している船員達も多い。唯一無事なのはノニオーイ達のパーティーだけだ。

次に巨大生物に襲われたらどうなってしまうのだろうか。以前襲ってきた海賊もあれで諦めたとは思えない。やつらにとってみれば、

久しぶりの獲物のはずだから……。

「海賊だ〜!」

考え事をしているうちにいつの間にか寝ていたようだ。突然の声に向かいのベッドで寝ていた秋留も眼を覚ます。

一階で寝ているジェットとカリューも調子の悪そうな呻き声を上げながら起き上がったようだ。

俺達は素早く装備を整えると、船室を出て甲板へと走った。体調の良くないカリューとジェットはフラフラと遅れてやって来る。

「この前のやつらか?」

俺は甲板で望遠鏡を覗いている船長に向かって聞いた。船長は静かに頷く。

「前回と比べると状況が悪すぎる。傷ついた船員も多いが、船へのダメージが大きくてスピードが出ない……」

船長の齒軋りが聞こえてくるようだ。

俺は舵を取っているノニオーイの方を振り向いた。奴も真剣に舵を握っている。残念ながら船での攻防は奴に任せるしかない。

しかしノニオーイの操船もむなしく、三隻の海賊船は俺達の船を困うように展開していつている。

秋留の魔法やこちらからの大砲を警戒してか距離をあげながら……。奴らも馬鹿ではないようだ。

「何かないのか? 一時的に爆発的なスピードが出たり空を飛んだり出来るような仕組みとか……」

俺の台詞にノニオーイが俺の方を見もせず「へっ」と笑った。くやしい。しかし、そんな仕組みはないという事も解っていた。

少し離れた場所から巨大な鳥類の羽ばたきが聞こえてくる。恐らく他の奴らには聞こえていないに違いない。

俺は周りを見渡した。

俺達の船の右後方に展開していた黒船に、人間二人程の高さがあ

る鳥類が羽ばたいているのが見える。

「秋留、見えるか？」

俺の視線を追って、秋留も右後方の船を見つめる。その顔が少し引きつった。

「スペルワイバーン……」

秋留が震えた声で呟く。スペルワイバーンというモンスターは聞いたことも無いが秋留の反応を見ると厄介な相手だということが分かる。

「黒魔法を唱える事が出来る竜型のモンスターじゃな……」

もともと白い顔が風邪で青くなつたジェットが死にそうな声で言う。いや死んでるんだけど……。ジェットは生前は大陸各地を回り魔族やモンスターと戦っていたため、俺達が知らない事を知っていたりする事が多い。

「とりあえず近づいてくるぞ！ 魔法で迎撃出来ないのか？」

俺はネカーとネマーを構えながら秋留に言った。

秋留が残念無念そうに首を横に振る。

「あいつに魔法は効かないの……それでいて黒魔法を唱えてくるっていうムカツクモンスターだよ」

秋留の顔色が変わった理由が分かった。

そもそも一般的に魔法の効かないモンスターは魔法を唱えてくる奴はいない。

つまり物理攻撃が有効だったりするのだが……。魔法を唱えてくるとなると物理攻撃を仕掛けるために突っ込む訳にもいかない。

そのスペルワイバーンの口が大きく膨らんだ。何か吐いてくるに違いない。

秋留は船を守るようにワイバーンの前に立ち、防御呪文を唱え始めた。

「精霊達の楽園を守りし風の門は、何人も通さぬ無敵の防壁」

秋留の詠唱と共に回りに風が巻き起こる。

「ヴィントヴァント！」

ワイバーンが炎を吐き出したのと秋留が魔法を唱えたのはほぼ同時だった。

秋留が唱えた魔法により船の後方に大きく風の壁が作られたのが見える。

その風の壁にワイバーンの吐き出した炎の玉が弾き飛ばされた。

「きゃあっ！」

秋留が甲板の中央まで吹き飛んだ。その衝撃を背中の生きたマント、ブラドーが吸収する。しかし秋留の身に着けていた新緑の鎧が大きく切り裂かれていた。

どうやらワイバーンは炎の玉を吐きながら突っ込んできたらしい。そのワイバーンが俺達の後ろにあったメインマストを切り裂いて後方へと飛んでいった。

「すぐに修理しろ！ 海賊船に追いつかれるぞ！」

船長が船員達に指示する。

しかし作業を行える船員達の数が圧倒的に少なすぎる。

その時、今度は左後方の海賊船から海の中を凄い勢いで近づいてくる何かの存在に、俺は気付いた。

鞆に手を突っ込んで、頼りになる小型爆弾を着水しない様に調整して相手に投げつける。

派手な爆発が海面すれすれで起こると同時に大量の水しぶきが上がった。やったか？

だが海中から人間を丸呑みする事が出来そうな巨大な魚が姿を現した。その右半分位にダメージを負っている。

巨大な魚の眼が俺を睨みつけた。

俺は危険を察知して素早く左回転をして木箱に隠れる。俺がいた場所の甲板が吹き飛んだ。

奴の口から凄い勢いで発射された水の弾丸の威力だ。

船の前方で炎が上がった。どうやらワイバーンが暴れているらしい。カリューとジェットの病人ペアがフラフラしながらも船の先端に向かう。

メインマストの柱の後ろには、秋留がダメージを受けた肩の辺りに手を当てて様子を窺っている。

「奴ら、奇襲には慣れているみたいだね」

秋留が息を整えつつ言う。まあ奇襲と言えば海賊の十八番と言ってもいいかもしれない。

頭上に不気味な音を聞いた俺は咄嗟にネカーとネマーを連射する。真ん中の海賊船からぶっ放された大砲が俺達の頭上で派手に爆発した。

「危ねえじゃねえか！ 馬鹿野郎！」

舵を握っていたノニオーイが叫ぶ。確かに今の攻撃は当たっていたら致命的なダメージを受けていたかもしれない。しかし叫んでも相手は手を緩めてくれるわけじゃないぞ。

「そろそろ魔法が届くかな……」

秋留は俺に言いながら再び船の後方に立つ。俺も秋留をサポートするために一緒に後方へと向かう。左手にはネマー、右手には小型爆弾を持っている。ちなみに今までお世話になった小型爆弾はコレで最後だ。

「業火の身体を持ち 煉獄の心を抱く者よ」

秋留の呪文の詠唱に気づいたのか、海中から魚モンスターが突然現れた。俺は左手のネマーを連射する。

俺達と同じくらいの目線までジャンプした魚モンスターは、発射した硬貨の弾丸を器用に身体をひねってかわした。

魚モンスターの身体が縦になる。そのせいで的が小さくなった。

魚モンスターもそれを狙っていたらしく、今にも口から水の弾丸が発射されそうだ。

「残念！」

俺の腕をそこら辺にいる狙撃手と一緒にしないでくれ、という気持ちを含めて言った。

俺は慎重にネマーを連射した。

全弾命中して魚の頭部が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「烈火の眼差しを知らぬ哀れな者達を汝の瞳で貫け」

目の前でモンスターの頭部が吹き飛ぶというショッキングなシーンを見ても、秋留は動揺一つしない。そこが一般の女性と秋留という女神の違いかもしれない。

「コロナレーザー！」

秋留が両手で持つ杖から、真つ赤な光線が後方正面の海賊船にぶち当たる。俺の耳には慌てる悪海賊達の心地よい声が聞こえてきた。あつという間に魔法を食らった船が燃え上がった。まずは一隻撃破か。

その様子を見たはずの他の二隻の海賊船は怯まない。普通仲間の船が一撃で破壊されたら少しくらいビビッても良いはずだが。

「ぎゃおおおん！」

前方で暴れていたはずのワイバーンが俺達の頭上を通り過ぎた。

その勢い良く上空を飛び回るワイバーンの背中には何とカリキューがしがみついている。

「あいつ、乗り物に弱いくせに無茶するなあ」

俺は言ったが、改めてカリキューの凄まじさに驚いた。

カリキューはワイバーンの背中に剣を突き刺したまま、その手を離さずにワイバーンに乗っているのだ。

怯むことなく両手で持つ剣に力を込めている。

カリキューの持つ剣の魔力の影響でワイバーンの身体が燃え始めた。カリキューは雄叫びと共に剣に一層に力を込めた。

「ワオオオオン！」

ワイバーンが悲痛な叫び声を上げる。カリキューの剣がワイバーンの身体を貫いた。

ワイバーンは断末魔の叫びと共に海へ墜落した。

背中に乗るカリキューと共に……。

海中に消える瞬間、カリキューの「しまった！」という顔を見た気がした。あいつやっぱりアホだな。後のことを何も考えてない。これでまた風邪患者が増える事になりそうだ。

「さて、あと二隻いるけど……」

秋留は何事も無かったかのように話を続けた。モンスターも倒し終わったジエットが隣に来た。若干焦げている。

「あつちも近づくと私の魔法食らうかもしれないし、こっちは逃げ切りたい……」

秋留は考えながら言った。

「という事は切り札を使う時が来たみたいだね」

切り札？ 秋留はこういう状況を予想して切り札を用意していたのだろうか。

「切り札？ それは一体何だ？」

真後ろからショットガンを構えたガロンが姿を現した。その銃口が俺達に向けられている気がする。

「え？ あんた達が切り札を隠し持つてるんじゃないかなあ〜と思つてね」

秋留が慌てて言った。

ガロンのタバコをくわえた口がニヤリと笑う。

「ああ、あるぜ……切り札……」

そう言い残すとガロンは船の後方に向かって歩いていった。海賊船二隻を見渡す。

「大砲なんかぶつ放すから沈没するはめになるんだぜ……」

ぷつとタバコを海に吐き出し、ガロンは新しいタバコに火をつけた。

「お前ら結構やるよな」

次はラムズが船の前方から歩いてきた。その肩にはタートルが乗っかっている。

「大砲は浸水が酷くて全部使い物にならなくなっていたぞ」
ラムズは衝撃的な告白をする。

「いよいよ海賊船との対決が不利になっていっているようだ。」

「そういえば後は出現率が低い染次郎が揃うとノニオーイパーティーが集合することになるな。」

「いたっ！ 押さないでよ！」

船室へと続く階段の方からイザベラの声が聞こえてきた。甲板に上って来たイザベラの背中には刀が突きつけられている。

俺は咄嗟にネカーとネマーを構えた。

「動かない事だな」

いつの間にか近くにノニオーイが近づいてきていた。こいつらは盗賊と一緒に気配を消すのが上手い。俺は今後、盗賊や海賊と仕事をするのは止めようと思った。

それにしてもノニオーイが言った「動くな」とはどういう意味だったのだろうか。

俺は船室へと続く階段に視線を戻した。イザベラの背中に刀を当てているのは染次郎だ。

「どういっつもりっ？」

俺が叫び切る前に背中を何者かに殴られる。一瞬息が止まった。

「うるせえぞ！」

ノニオーイの邪悪な声が聞こえた……邪悪？

俺の後ろにいるのは、今や邪悪な雰囲気を全身から発しているノニオーイだ。

何だ？

何がどうなったんだ？

気付くとイザベラ達三人が染次郎に連れられて俺達の隣までやって来ていた。

「大丈夫ですか？」

イザベラの旦那であるリーに起こされた。

俺は状況を把握しようとして周りを見渡す。いつの間にかまともに立っているのは俺達だけになっていた。船員達は至る所で倒されており、船長までもが甲板の端で伸びている。先程のモンスターとの戦闘で全員倒されてしまったのだろうか。

「全員、眠ってもらったよ」

ラムズが俺の視線に気づいて説明してくれた。段々と状況が飲み

込めてきたぞ。

俺は更に視線を彷徨わせ、衝撃を受けた。

染次郎の腕にはイザベラとリーの子供であるリュウが乱暴に抱かれている。状況を理解していかないらしく、仕切りに染次郎の髪の毛を掴もうとハシヤいんでいる。

そういう事か。

さすがに子供を人質に取られたら手も足も出ない。俺達が未熟だった。「任せて」と豪語していた秋留の方を見ると意外に冷静な顔をしている。秋留の事だから必死に策を考えているに違いない。

誰も舵を操っていない船はただ海の上を漂っていた。

二隻の海賊船がもう間近に迫ってきている。

俺の眼には船に乗っている海賊達の邪悪そうな顔が一つ一つ確認出来た。久しぶりの獲物に心が躍っているようだ。中には秋留の事をイヤラシイ眼つきで見ている海賊もいる。俺は思わずネカーとネマーをぶっ放してしまいそうになって踏みとどまった。

「お主等の目的は何かな？」

ジエットが冷静に言った。確かにこのままでは海賊船に追いつかれてしまう。

「あゝあ、ちったあ、自分らの少ない脳みそで考えてみるや！」

今までのノニオーイの口調とは明らかに違う。

ちなみにジエットの頭の中に本当に脳みそがあるのかどうかは疑わしい。とクダラナイ事を考えている場合ではなかった。

俺は暫く考え、混乱して何も考えられない事に気づき、頭脳の女神である秋留を見る。

「貴方達だったのね。この辺の海域で悪さをしている海賊っていうのは」

秋留は言った。

確かにそうだ。言われてみればその通りかもしれない。俺は少し冷静になって考えてみる事にした。

まず荒波の中をイザベラ達が出航しようとする。

腕の良い海賊を雇うのは当然だろう。

レベル測定大会で活躍した冒険者をイザベラがスカウトして俺達が雇われた。

そして出航。

何日か後に海賊に一度目の襲撃を受ける。こちらは揺れる船のせいで襲ってくる海賊団を沈める事が出来なかった。それはノニオーイの操船の悪さだと思っていたが、仮に仲間の船を守るためだとしてたら……。

そういえば巨大なタコモンスターに襲われた時はノニオーイは揺れる船を見事に操作していた。

次々に今までの疑問が解明されていく。

さてよ……。

「それじゃあ、海賊船の三隻のうち一隻が沈められたのはどういう事だ？ お前の操船での外せば良かったんじゃないのか？」

ノニオーイは声だけではなく顔まで別人に変わりつつある事に俺は気づいた。

俺の質問にノニオーイは鬼のような顔で答える。

「後先考えずに大砲をぶつ放したからだ。海賊は頭の悪い奴ばかりで困るよ、全く……」

自分の思い通りに動かなかったから沈めさせた？

俺は改めてノニオーイの邪悪さを思い知らされた。

「と、そろそろ馬鹿だが力や残忍さは人一倍強い、仲間達の御到着だ……」

ノニオーイが近づいてきた二隻の海賊船の方に向かって歩く。

それと同時に歓声が巻き起こる。

『ノニオーイ船長、バンザーイ！』
海賊達が一斉に叫ぶ。

ノニオーイは軽く手を上げた。

頭のキレル海賊船長のノニオーイが、餌を求めて陸に上がってきて獲物を海におびき寄せたんだ。まるで熱帯に生息するワニの様に。

そして雑魚海賊共は集団で襲ってくるピラニアか。

『ノニオーイ船長！ ノニオーイ船長！』

「ヘソ万歳！ ヘソ万歳！」

一瞬、ノニオーイの顔が悪魔のように豹変した。

ノニオーイは腰に隠し持っていた銃で「ヘソ万歳！」と叫んだ海賊の頭に風穴を開けた。

一瞬にして海賊達が静かになる。

「お前ら、あんまりハシヤギ過ぎて大事な事を色々忘れるんじゃないぞ！」

ノニオーイは銃を腰に戻すと俺達の方に振り返った。

「さて、状況はもう飲み込めたかな？ 俺達がお前らの荷物を頂くまで動くなよ……」

ノニオーイはそう言いながらサーベルをスラリと抜き、染次郎を抱いていたリュウの頬に刃を当てる。

リュウの眼が点になる。

「リュウ！」

イザベラが叫んで走り出そうとする。その手をリーが掴んだ。

「待つんだ！ 今行ったらリュウが余計に危なくなるだけだ！」

普段は大人しそうなリーが眼を見開き叫んだ。その眼は力強い。

「そうそう、動くなよ」

ノニオーイがサーベルを構えたまま歩く。そのまま甲板の端にあるベンチに腰をかけた。

「この船は商人の船だ！ お宝が沢山あるだろうから、遠慮せずに奪い尽くせ！」

ノニオーイの叫び声と共に海賊達が雄叫びを挙げる。今、正に俺達の船に乗り込もうとした時……何と秋留がトコトコと雪崩れ込もうとする海賊達の目の前に躍り出た。

秋留の予想外の行動にその場にいる全員の行動が固まる。

「あんた達、随分罪のない人々を殺めたみたいだね……」

秋留が声のトーンが下がっている。

これは秋留がネクロマンシーを使おうとしている前兆だ。秋留は今は幻想士だが過去に色々な職業に就いた事がある。ネクロマンサーになった経験のお陰で、ジェットもゾンビ稼業を営んでいられる。「沢山見えるよ、あんた達に恨みを持った人たちの怨念が……」

そう言つと秋留はブツブツと魔法を唱え始めた。

「ソウル・ハーデン・パニック！」

秋留が低い不気味な声で叫ぶ。

辺りの空気が一気に悪くなったと思うと、今まで見えていなかった何者かの存在が現れだした。

ある者は苦痛に歪んだ顔をし、ある者はこれから始まる晚餐に歓喜の顔をしている。しかしどの顔もこの世のものではない、まさしく悪霊……。

『ぎゃあああああ！』

『うあああああ！』

二隻の海賊船から呻き声が一斉に聞こえ始めた。

その声は肉体的に攻撃をされた時の声ではない。何か壊れるような不気味な断末魔。

「みんな、私の近くに来て。巻き添えくらうよ」

秋留が言った。

俺達は無言で秋留に近寄る。さすがに怖い。

「あ、ジェットは大丈夫だよ」

死人のジェットには悪霊は襲つてこないという事か。ある意味同類だしな。ジェットが悲しそうに少し離れた所に立った。

「ソウル・ハーデン・パニックっていう術は、近くにいる霊達の想いを強くする効果があるの。彷徨う霊がマイナス方向の想いを持っていけば……こういう結果になるの。ただし制御不可能」

秋留が可愛いけど物凄く怖い事を言つて近づいてきた悪霊を手で払つた。秋留の手に払われて、恐怖に歪んだ顔をした霊は消える。

「ごめんね、成仏してね」

秋留が小さい声で呟いたのが聞こえた。

ネクロマンサーは死者を操る魔法。マイナスイメージが多いため俺はあまり好きになれないが、秋留がネクロマンサーの術を使っているなら好きになれそうだ。

「てめえ！」

空気が震える程の声でノニオーイが叫んだ。

右手にはサーベル、左手にはリュウの小さい身体を掴んで掲げている。今にも刺してしまいそうだ。俺は咄嗟にネカーとネマーを構える。

「動くんじゃねえ！」

サーベルがリュウの左頬に軽く刺さる。あいつめ許せない！

それにしてもリュウはあんな状態でも泣き喚いたりしない。それほどばかりか頬に刺さった傷から血さえ出ない。……えっ？

俺が気づいたタイミングでノニオーイも気づいたようだ。

「な、何だコレは……どうなってるんだ？」

今まで強気だったノニオーイがうろたえた。

そのウロタエっぷりを見て、秋留が小悪魔のような危険な笑みを浮かべながらノニオーイに近づく。ノニオーイ達パーティーのメンバーも呆気に取られていた。

「ところであんた達、ミガワリンって知ってる？」

ノニオーイ達は揃って素直に首を横に振る。

ノニオーイ達のパーティーの周りでは海賊達が絶叫しながら海に落ちたり、その場に倒れたりしている。その地獄絵図の状況に少しビビッているのかもしれない。

「ちょっとした魔力を込めれば、その人の思うように形を変える不思議な水……」

それを聞いたノニオーイは左手に掴んでいたリュウだと思っていた物体を見つめる。リュウだと思っていたソレがニヤリと笑った。

「そ、そのミガワリンは動く事も出来るのか？」

俺は半ば放心状態のノニオーイに変わって質問した。

「普通じゃ動かないんだけど、私はちよつと応用して、近くにいた女の子の幽霊を乗り移らせたの」

それもネクロマンサーの力という訳か。

巨大タコと戦闘している時にイザベラ達の場所へ安全確認に行っていたな。その時にちよつとした小細工をした訳か。確かあの時は染次郎も戦闘に加わっていたからな……。神出鬼没の染次郎に見られずに済むタイミングを逃さなかったという訳か。

俺は心から秋留の戦略家っぷりに感動した。やはり俺達パーティーの頭脳は桁外れだ。

「ちなみにその子もあんた達に恨みを持っていたみたいだよ」

秋留の台詞の直後、ノニオーイの抱えていたリュウの形が崩れた。ただの水に戻ってノニオーイの身体を塗らした。恐怖のためかノニオーイは「ひいつ」と小さな声を上げた。

ノニオーイ達パーティーの周りをミガワリンに宿っていた女の子の幽霊が楽しそうに飛び回る。

暫くノニオーイ達を弄んだあと、満足した様に女の子が秋留の目の前までやって来た。

「……ありがとう、おねえちゃん……あたし満足出来たよ……」

女の子の幽霊が秋留に霊、じゃなくて礼を言っているのが口の動きで分かった。

きつと秋留には声自体も聞こえているに違いないが、ネクロマンサーの力の無い俺達には何を言っているのか聞こえはしない。

「じゃあね。天国でお父さん達と仲良くね」

秋留は女の子に手を振った。

目の前で女の子の幽霊が幸せそうに姿を消した。

「うがあああ！」

ノニオーイが叫び、両手に構えた大量のナイフを俺達に投げつけた。

俺、秋留、ジェットはイザベラ達の前に立ちはだかり、それぞれの武器や防具でナイフを弾いた。

取り乱しているノニオーイのナイフは威力も命中力も大分下がっている。

「てめえら、許さねえぞ……」

ノニオーイの趣味の悪いサングラスは床に落ちて潰れていた。先程の女の子の幽霊に翻弄された時に慌てて落としたのだろう。

「誰の命でも奪うような奴こそ許せない！」

秋留が叫ぶ。

その意見には勿論賛成だ。

俺とジェットは武器を構えて秋留の両側に並ぶ。

「初めから余計な策は練るんじゃないな……」

ノニオーイが静かに言った。その身体からは黒いオーラが見える気がする。

「お前らも動ける奴は攻撃を仕掛ける！ 動けない奴は俺が殺してやる！」

ノニオーイは倒れている海賊達に向かって容赦ない台詞を吐く。

放心状態だった何十人かの海賊達が俺達の周りを取り囲む。状況はあまり良くなったとは言えないが、人質がいらない分思っ存分戦う事が出来る。

そういえば本物のリュウはどこにいったのだろうか。秋留の事だ。安全な場所に隠したに違いない。

海賊一団との戦闘が始まった。その数およそ三十人。

「そうそう……」

ノニオーイが思い出すように言った。

「染次郎……」

「はっ」

ノニオーイの呼びかけにすぐ傍にいた染次郎が返事をする。

「お前は消える！ 二度も失敗しやがって！」

ノニオーイはそう言うと、染次郎を突き飛ばした。なぜか俺達が後ろめたい気持ちがあるのは気のせいだろうか。

染次郎は俺達を一度睨むと、スッと消えた。

暫くの沈黙。

何か後味悪いんですけど。

その沈黙を破るかのように秋留が一步前へと出て杖をかざした。秋留が魔法を唱え始めると、俺とジェットは秋留を援護するため近づいてくる海賊を迎撃する。

俺はネカーとネマーで海賊その一の頭を吹っ飛ばす。俺の容赦のない攻撃に海賊の一部が一瞬立ち止まった。隣ではジェットが「人を殺すのは嫌いなんで？」という眼で見ている。

基本的に俺は人殺しはしない。

この世の中、凶暴なのはモンスターや魔族だけではない。同じ人間でも危険な奴は沢山いる。

そいつらとの戦闘を考慮した法律もこの世界には存在する。その法律では、殺されると思った時は構わず迎え撃て、という事が書かれている。詳しいことは知らない。

後日、殺された者の関係者に訴えられた場合は治安維持局により詳しく調査される事になる。

この法律は要するに、悪人を殺しても関係者から訴えられる事はないだろう、という事を前提に作られているのだ。

それでも俺は人殺しはしたくない。

似たような姿形をした魔族を倒すのもあまり気が進まない。こんな性格では冒険者に向かないと言われたこともあるが、俺は今もこうして冒険を続けている。

俺が今持っている銃に詰まっている硬貨はいつもの千カリム硬貨ではない。一昔前まで使われていた百カリムの石製の硬貨だ。

今は百カリム以下は紙幣になっているため、俺は今まで人との戦闘では苦労していた。千カリム硬貨は銅製のため威力は抜群なのだ。しかしこの石硬貨なら相手は運が良ければ死なない。俺は相手の力量までは気にするつもりはないから、この石硬貨なら思う存分ぶっ放す事が出来る。

「うがっ」

「うっっ」

俺の的確な射撃で石硬貨が海賊達の脳天に直撃する。

その時、背後で「ガチャン」という音を聞いた。俺は慌てて上空に飛ぶ。

足元で床が破裂した。

上空で身体を捻ると、予想通りガロンが銃を構えてニヤけていた。「俺の石の散弾銃を真似しやがったな……」

確かにノニオーイ達のパーティーとレベル測定大会が終わった会場に対決した時に、ガロンが石の弾丸を使用していたのをヒントにしている。その後、港町の骨董品屋を回ってこの石の硬貨を発見したのだ。

俺は着地と同時にネカーとネマーでガロンを撃つ。しかし軌道を読んでいたのかガロンは難なくかわしてショットガンをぶっ放してきた。

「くっっ！」

俺は慌てて避ける。

貴重な飛竜の羽で作られているコートの端が吹っ飛ぶ。これ高価なんだぞ〜！

近距離ではガロンのショットガンには敵わない。俺は後方に飛んで間合いを空けた。

「ひよ〜！」

俺の真後ろから雑魚海賊が襲いかかってきた。右手のネカーをホルスターに戻し、腰の黒い短剣で雑魚海賊の手首を切る。その動作はまばたきをする時間よりも短い。

「頑張つて止血しないと死ぬぞ」

俺は更に後方に飛びながら手首から血を噴出している海賊に向かって言った。

しつこくついて来るガロンが再びショットガンをぶっ放す。近くにいた海賊の陰に隠れて広がる銃弾を避ける。ガロンは俺と違い今日は石の弾など使用していないため、俺が盾にした海賊は叫び声と

共に絶命した。

「てめえみたいないかい考えの奴に、俺を倒す事は出来ないぞ」
ガロンが俺を追いかけながら言った。

確かにこんな戦い方では効率は悪いかもしいないが、ある意味、俺から直接的な攻撃をしない分相手にとっては戦い難いに違いない。俺はガロンや他の海賊の攻撃を避けながら周りの状況を確認する。秋留が避けながら呪文の詠唱をして雑魚海賊達を燃やしていく。耐えられなくなった海賊達は海へと飛び込む。秋留も人殺しはあまり好きではない。

一方、チエンバー大陸の英雄と言われていた聖騎士のジェットは紳士的な戦闘をしているが、襲ってくる敵は容赦なく切り倒していた。やはり俺や秋留より戦い慣れしているのは確かだ。

今はあの世とこの世の境界線を彷徨っているかもしれないカリユーは、悪人に対しては容赦はない。ジェットとは違いすすんで敵に突っ込んで行く。

「俺も混ぜろや」

突然俺の隣にノニオーイが出現した。その拳が俺の左顔面にクリンヒットする。

俺は痛みを堪えてネマーをぶつ放したが、そこにノニオーイの姿は既にある。次は俺の反対側にノニオーイが出現した。無意識のうち右手に持っていた短剣を振った。

「うおっ」

ノニオーイが驚きと共に仰け反る。ノニオーイの着ている真っ白なスーツが横に切れた。

「俺の動きについてくるとはな」

そう言うとノニオーイは間合いを取ってナイフを二本投げてきた。既に気分は落ち着いたらしくナイフが的確に飛んでくる。

それをかわしたところへガロンのショットガンが火を噴いた。

「うああっ」

何とか横回転して避けたが散弾の何発かが俺の左足にヒットした。

回転しながらコートの内側から小さなナイフを取り出してガロンに投げつける。しかし大きめの銃身で防がれた。

「足に食らったようだな。この先避けられるかな？」

ノニオーイがフラツと近づいてきたと思うとサーベルで俺に突きを食らわしてきた。左足にダメージを負ったために体勢を崩して運よくサーベルの突きを避けることが出来た。

その崩した体勢のまま右手の短剣でサーベルを払う。高い金属音と共にノニオーイのサーベルが折れた。

「ほう……」

折れたサーベルを一瞬見た後、ノニオーイは俺の腹を蹴り上げた。海への落下を防いでいる船の鉄柵に背中を強打する。

ノニオーイの更なる蹴りを身体を捻って避けた。ノニオーイの蹴りが鉄柵を揺らす。

「ジ・エンドか？」

身体を捻ったところにガロンがショットガンを構えていた。ヤバイ！

俺の目の前で鈍い音と共にガロンの身体が突然宙を舞った。

「がるるるる……」

全身をズブ濡れにしたカリューが俺の隣に立っていた。その眼は凶悪そのものだ。睨みつけるだけで弱い奴なら倒せるんじゃないだろうか。

カリューは獣のように四本の手足で床を蹴り、ガロンに追撃を放つ。ガロンは顔面を押さえながらカリューの攻撃をかわす。海から上がったばかりのカリューの拳はガロンの顔を直撃したようだ。

「んじゃあ、一対一と行くか……」

ノニオーイが近くに転がっていた雑魚海賊が握っていたサーベルを拾った。

左足のダメージが深刻だ。このまま戦闘したら勝てる可能性は低い。俺は素早くネカーとネマーを両手に構えてノニオーイにぶつ放す。先手必勝だ。

しかしノニオーイの姿は見えない。

でも俺は避けられる事を予想していた。ノニオーイのいた空間の方に向かって素早くダッシュし始める。

俺の後方でノニオーイのサーベルが宙を切り裂いた音が聞こえた。やはり真後ろに移動していたか。後方を確認せずにネカーとネマーをぶっ放す。

「うおっ！」

ノニオーイが驚きの声を上げた。しかしサーベルで硬貨が弾かれた音が聞こえた。仕留められなかったか。

俺は止まる事なく、そのまま走り続けた。

眼の端にはイザベラとリーが雑魚海賊達と戦っている姿が映った。片手で鞭を操るイザベラと体術が半端ではないリーは、とてもじゃないがタダの商人とは言えない。俺達よりレベルが高いのではないだろうか。

「よそ見していると危ない、ぜっ！」

「ぜっ」でノニオーイがナイフを投げつけてくる。俺は気配を察知して左に避けた。

「ちっ、やりにくいぜ」

ノニオーイの声に怒りが大分混じっているのが分かる。俺は距離を保ちつつ時々機を狙って短剣を投げつけたがあまり効果はない。そろそろ大丈夫か。

俺は勢いよく振り向くと同時に黒い短剣でノニオーイに襲い掛かる。

黒い短剣の一撃目でノニオーイのショボいサーベルが再び折れた。この短剣、実は結構な切れ味をしている気がする。

ノニオーイは怯まずに蹴りを繰り返す。俺はそれをノニオーイに突っ込みながら避けて短剣を突き出した。

「ぬっっ！」

ノニオーイが距離を取る。俺は短剣から両手に銃を持ち替えて距離を取ったノニオーイに硬貨を乱射する。

ノニオーイはギリギリのタイミングで硬貨を避けたが、そのうちの三発がそれぞれ左肩、脇腹、右太腿に直撃した。

突然、大量の水と共に俺の身体がノニオーイから更に離れた所に流された。流されながらアチコチに身体をぶつける。

「だ、大丈夫でした？」

ノニオーイの隣にはラムズが寄り添っていた。ラムズの頭の上にはカメのタートルが乗っかっている。

そうか。

さつきから横槍が多いと思ったら、ノニオーイは悪海賊団の船長だったか。船長を守るためにやたらと手下が俺を攻撃してくる。今も俺の背後から近づいてきた雑魚海賊を裏拳で殴り倒したところだ。非戦闘員である俺的にはあまりボスとは戦闘したくないのだが……。

「べちゃ、べちゃ……」

その時、海から不気味な音を発して近づいてくる何者かの気配を感じた。

「シーさん、よく来てくれたね」

ラムズが海から上がってきた半魚人に向かって話しかける。その半魚人は全身水色をしており、身体の至る所に大小様々なヒレがついている。それにしてもシーさんとは……。

「ラムズだったのね……鳥モンスターや魚モンスターを操っていたのは」

向こう側から秋留が現れた。

どうやら雑魚海賊達は大方片付いたようだ。それより秋留が今言った台詞。つまり三隻の海賊船から襲ってきたモンスター達はラムズが操っていたという事か。

「俺はモンスター使いの素質もあるんだ。悪かったね……」

悪かったね、と言いなながらラムズは秋留に向かって攻撃を仕掛ける。あいつもやる時はやる奴らしい、と関心している場合ではない。「貴様の相手は俺だ！」

ノニオーイが真っ白なスーツを脱ぎ捨て叫ぶ。

身体中にナイフがぶら下がっている。あまり動くと自分の身体に刺さりそうなくらいだ。

「お前、逃げながら自分で回復してただろ？」

ノニオーイがシャツのポケットから瓶を取り出して飲み干した。その間に攻撃も出来たが、なぜか身体が動かなかつた。とてつもない恐怖を感じる。

「服の内側から水製の回復薬を足の怪我に流したんだ……。お前も今の飲み薬で完全回復か？」

俺は冷静を装って答えた。

しかしノニオーイから漂ってくる恐怖感だけは消えない。

「回復？ 俺は回復なんかしない。その傷を見て相手への復讐を常に忘れないようにしている……」

アホか。

とんでもなく危険な奴だったらしい。俺はネカーとネマーを握りなおした。

「今飲んだのはただの酒だ。喉が少し渴いたんでな」

ノニオーイが再び襲い掛かってくる。

俺は両銃で迎え撃ったが全て避けられた。ノニオーイの動きが先程までとは全然違う。なぜか捕らえられそうに無い。気づいたらノニオーイの蹴りが顔面に迫ってきていた。上体を反らしつつ再び銃をぶっ放したが、今度は後方から背中に蹴りを食らった。

そのまま踏ん張らずに俺は前転をしつつ後方に銃を構えた。

「はあっ」

真横からのノニオーイの蹴りが俺のネカーとネマーを上空に弾き飛ばした。そのノニオーイの蹴りがそのまま俺の顔面を捉える。ちよつと仲間に助けを求めたい気持ちになってきた。

俺は腰から黒い短剣を取り出し、ノニオーイに攻撃を仕掛ける。

その途端にノニオーイは距離を開けてナイフを投げってくる。

無意識のうちに持っていた短剣で全てのナイフを弾き落とす。そのうちの一本がノニオーイの肩に刺さった。

「短剣の腕は結構なものようだな。銃はまだまだだ。」

ノニオーイが失礼な評価をする。

俺は短剣などほとんど使うことは出来ない。今のはたまたまだ。しかし間違っても口には出さない。

ノニオーイは肩に刺さったナイフを捨てて、腿に下げている大きな銃を構える。

「銃の腕は俺の方が上かな？」

ノニオーイは何のモーションもなく銃をぶつ放した。一瞬避けるのが遅かったら脳みそをぶちまけていたところだ。

俺はノニオーイとの距離を開け、短剣を腰に戻す。

「何だ？ 何かまだ武器があるのか？」

俺は黙って空中に手をかざす。その手に見事にネカーとネマーが戻ってきた。そしてこっちも負けじと素早さに全神経を注いで銃を乱射した。

その硬貨の弾の一発一発にノニオーイが銃をぶつ放した。石の硬貨はノニオーイの銃から発射された鋼鉄の弾で簡単に弾け飛ぶ。

俺とノニオーイとの距離は十メートル程。その真ん中付近でお互いの銃が発射した弾が攻防を繰り返している。

「まあまあやるじゃないか」

ノニオーイは言ったが、俺は敗北感を味わっていた。

なぜならノニオーイの銃は弾が五発しか装填出来ないのだ。一方俺の銃はうまく詰めれば硬貨が二十個は入る。つまり俺との乱撃の間、ノニオーイの方が弾を装填している回数は圧倒的に多いのだ。

それなのにノニオーイとの銃撃に競り勝てない。

動揺のせいかなノニオーイのぶつ放した弾が一発、俺の右肩を貫いた。右手に持っていたネカーを落とさないようにホルスターに戻して追撃を転がって避ける。

右肩に激痛が走った。

「ボロボロになってきたね。ブレイブ」

ノニオーイが意地悪く言った。俺は右肩を抑えながらノニオーイ

との間合いを取る。ちなみに両手袋には傷薬が塗りつけてあるため、こうして肩に当てておけば少しは良くなったりする。

「選手交代と行きますかな？」

俺の後ろから我らがヒーロー、ジェットが登場した。助かった。

「ふっ。お前では俺に触れる事も出来んわっ！」

ノニオーイが素早く動く。

ジェットはその動きを眼で追い、マジックレイピアを振った。

「ざしゅっ」

上空にノニオーイの片腕が飛んだ……いや、あの色白い腕はジェットの腕だ。

「ぬおおおお！」

ゾンビになっても痛さはある。それが中途半端に人間に近い死人としてのジェットの弱点だ。ここまで実際の人間に近いのは秋留の魔力の影響だと思う。

そしてノニオーイがサーベルでジェットの首を叩き落した。こいつ容赦がない。明日は我が身か……。

だが驚いたのはノニオーイだった。

首の無くなったジェットが残った左腕でレイピアを突き出したのだ。

しかしノニオーイは驚きながらもレイピアを寸前の場所で避ける。さすがとしか言いようがない。ちなみに首が無くなって声が聞こえないが、ジェットは断末魔の叫び声を挙げていたに違いない。

とうとう制御出来なくなったのか、ジェットの身体がその場に倒れた。

「こ、コイツは何なんだ？」

ノニオーイが乱れた髪を直しながら言った。先程の女の子の幽霊やジェットのスプラッターっぷりにビビっているところを見ると、ノニオーイは怖い事は苦手には違いない。

まあ俺も苦手だから、怖い事をしてスキを作るのは難しい。

「ジェットー！」

何とかしないと。

あいつの動きについていけるのは俺だけかもしれない。このままでは俺達は全滅だ。何より秋留を足蹴にしたのは許せない。

俺はノニオーイがカリューと戦闘し始めたのを見計らって、隠し持っていた最後の傷薬を飲み干す。

僅かだが身体が動く。

だが、このままでは勝てない。

観察するんだ。盗賊としての罫を見破る洞察力でノニオーイの弱点を探すんだ。カリューと戦っている今がチャンスだ。カリューはスタミナだけは半端ではない。カリューのスタミナが尽きる前にノニオーイの弱点を……。ない。

暫く見ていたが奴の動きには無駄がない。予測が出来ない。第三者として見ているとよく解る。ノニオーイは攻撃をする時にタメが全くないのだ。

誰でも攻撃を仕掛ける前には一度「これから攻撃をするぞ」というタメが入る。筋肉が動き出そうとする反動が現れるはず。

それがノニオーイには全く無い。

海賊として磨いた技なのだろうが、なぜ正しい事に使えなかったのだろうか。

普通に冒険者として仕事をしていれば……いや、悪海賊の方が儲かるに違いない。俺も悪盗賊に……。

などと、クダラナイ事を考えているうちにカリューの身体が吹っ飛んでピクリとも動かなくなった。

ゴメン、カリュー。あんまり観察出来なかったや。

「あゝあ、また海賊団、ゼロから作らないとな」

ノニオーイが呟いた。

その身体が俺を背にして近くにあったベンチに腰を下ろした。今だ！

今のお前はスキだらけだぞ！

俺は最期の力を振り絞ってネカーとネマーをぶつ放した。
木製のベンチが派手に吹っ飛ぶ。

「ノニオーイは……いない！」

「てめえのケチな作戦には引っかからんよ」

ノニオーイが俺の頭目掛けて足を振り下ろす。頭を潰す気が。

俺は転がりながら起き上がった。

「はっはっは。必死だな、ブレイブ」

俺は近くの鉄柵に手を突きながら立っている有様だ。しかしあのまま寝ている訳にはいかない。

ちくしょう！

何かないのか、あいつの弱点。

何か心を揺さぶる物でも良い。さっきの女の子の幽霊出てきてくれないかな。

「！」

ノニオーイのモーションのない蹴りが俺のコメカミをかすって鉄柵を揺らした。他力本願な事を考えている場合ではない。

と、近くに脳天に穴の開いた海賊が横たわっているのが眼に入った。

俺の銃でつけた傷ではない。

そういえば……。

俺は考えながらノニオーイとの距離を取る。その間、短剣や投げナイフで牽制しているが、ノニオーイには全く当たらない。

「くっ！」

突然、ノニオーイの銃が火を噴いた。俺はたまたま足元に転がっていた死体に足を取られて転んだ。すぐ頭上を弾丸が走る。

上半身裸の悪海賊らしい出で立ち。手首が切れているところを見ると俺が倒した海賊らしい。ちゃんと止血しないからそうなるんだぞ。

「何見てんだ？　そういう趣味だったのか？」

ノニオーイがフザけて言った。

完璧に舐められている。今までコケにされた分、俺をいたぶりながら殺すつもりらしい。

しかし俺は気になって、先程の脳天直撃海賊を再び見た。脳天を打ったのはノニオーイだ。

あの時はあまり気にしなかったが、あの海賊は何と言ったか？目の前の上半身裸の男のヘソが出ているのに気づいた。

「へそ……」

ぼそつと言った一言でノニオーイの身体がびくつと動く。そつだ。

脳天を打たれた海賊は「へそ万歳」と連呼していた。どういう意味だ？　こんな時、頭脳明晰な秋留なら何かヒントをくれるはずなのだが。

俺が考えを巡らしている間にノニオーイは銃を乱射してきた。

しかし先程よりは軌道が読める。

俺は身体のうちこちに傷を負いながら何とか避けた。攻撃が当たらないノニオーイは少し焦りつつあるようだ。

「へそ！」

俺はとりあえず意味も分からず叫んでみた。再びノニオーイの身体がびくつとしたかと思うと、顔が悪魔のように豹変した。

「その口、すぐに利けなくしてやる！」

ノニオーイが蹴りを繰り返す。身体を捻って避けるとノニオーイの銃が火を噴いた。そのまま床に倒れこみ弾丸を避けた。

俺はそのままノニオーイに脚払いを仕掛ける。

「どらあっ！」

ノニオーイの怒りの蹴りが俺の脚払いを迎え撃つ。鈍い音がした。どうやら負けたのは俺の脚のようだ。痛みで頭がフラフラとする。このままでは駄目だ。頭を使い。冷静になれ。

「へそ」とは何だ。ノニオーイが「へそ」を気にするのはなぜなんだ。

どうしてだ

へソを気にする

ノニオーイ

くだらない俳句を作っている場合ではない。痛みで頭もロクに働かなくなってきた。

その時ノニオーイが投げた短剣が俺の脇腹に刺さった。

「ぐふっ」

思わず声が漏れる。しかし以前のようなナイフのキレはない。ノニオーイがへソを気にして集中力がなくなったからに違いない。

ナイフの痛みのお陰で頭が少しスッキリとした。

ん？

さっき考えた俳句……「へソを気にするノニオーイ」。へソ……

ノニオーイ……。何か変な響きだな。

あ！

ああ！

あああ！

俺は思わずニヤリと笑った。その反動が脇腹に来て傷が痛んだ。俺は必死に笑いをこらえようとしたが、それが余計に脇腹を刺激する。

「分かったぞ」

俺は言った。ノニオーイの攻撃が止まる。

「何か臭わないか？」

俺はワザとらしく鼻をクンクンとさせた。ノニオーイの身体がプルプルと震え始める。

「へソか？ 臭いのはへソか？」

俺は声を大きくして言った。今やノニオーイの顔が先程暴れまわった悪霊のような顔になっているが気にしない。

「へその臭い……へソ・ノニオーイ……」

「あっはっはっはっはっは！」

俺達の頭上で大爆発が起こった。

今までの小型爆弾の中で最高の威力だ。なかなか強敵だったぞ、ヘソ・ノニオーイ。

そして今までありがとう、小型爆弾を作ってくれた道具屋のオヤジ。

こうして俺達はとうとう「ヘソ海賊団」を壊滅させたのだった。

エピソード

「トンテンカン……」

「こつちに木材まわしてくれ」

アステカ大陸への中継地点である小さな島デズリーアイランド。

その島へはあと一日と言う距離の海上で、俺達の乗る船は修理をされている。

あと一日の距離と言っても、巨大モンスターやら海賊やらの攻撃によりボロボロになった船には少しキツイ。

ヘソ団達を縛りあげて、生き残った船員達を回復させるのに丸一日以上かかった。

今は秋留とイザベラの巧みな話術により、扱いやすいヘソ団の海賊達も俺達の船を修理するのを手伝ったりしている。

「本当に助かったわ」
そう言ったイザベラの両腕には大事そうに本物のリュウが抱きかえられている。

俺達が海賊達と激闘している間、リュウは腕を怪我したように見せかけていたクログローの白い布の中でスヤスヤと眠っていたらしい。

そういえば、チラリと見た時にイザベラとリーは戦っていたのに、クログローは全く戦闘をしていなかった事を思い出す。

「アステカ大陸へはまだまだ距離はあるが、海域的にはモンスターも海賊も少ないからな」

ヒゲ船長が自慢のヒゲを撫でながら言った。

そのヒゲをリュウが掴みたがっている。

「それにしても今回はヤバかったな」

まだ身体のおちこちが痛い。見た目は格闘家、職業は司祭のクログローに少し回復してもらったが、まだまだ全快にはほど遠い。クログローが優しい口調で回復魔法を唱えているせいもあって全快し

ていない気もするが。これが秋留だったらちよつとした回復魔法でも全快出来そうだ。

「私達もまだまだだね」

首に包帯を巻いた秋留が言った。

実は秋留はノニオーイの蹴りによりかなりのダメージを首に受けていた。それを無理してヘソの臭いに大笑いしたのは、そこで観客からの笑いがあつた方がノニオーイの怒りが増大するから、という事だった。あんまり無理をしないで欲しいものだ。

ちなみに今この場にいないカリューとジェットは風邪で療養中だ。身体の傷は魔法で癒せるが病気は魔法では治せない。

「おら！ ちゃんと荷物運べ！」

俺はネカーを構えて気弱そうな海賊に向ける。

「は、はい！」

ヨタヨタと木箱に詰められた荷物を海賊船から俺達の船に運び入れる。

「思わぬ収穫だったわね」

イザベラが思わずニヤリとした。

襲ってきた海賊船の中に略奪したと思われる金銀財宝が山ほどあつたのだ。俺はその財宝担当として扱いやすい海賊達を指揮している。

補給地についたら足のつかない財宝は山分けをする事になっている。足のつくものは治安維持局に渡すという事で俺が力説した結果だ。俺は胸が躍った。

「とりあえず、これからの予定を再度確認しますよ」

リーが本日何度目かの説明を始めようとしている。

俺と秋留はいい加減聞き飽きたため、その場を離れた。扱いにくい海賊や負傷して若干頭がぼくっとしている船員達が混じっているからだろう。

ちなみにあと二時間で海賊船や自分の船の修理を完了させ、明日の朝にはデズリーアイランドに到着するという無茶な予定を立てて

いる。

捕まえた海賊達も含めて一度デズリーアイランドへ行き、そこから治安維持局に海賊達の身柄を引き渡すらしい。

デズリーアイランドという島に行った事はないが、こんなに大人数の海賊団を收容出来る程の牢屋はあるのだろうか。

「私が傷つけられるのは、そんなに怒るような事だった？」

二人きりになった甲板の端。

海風が優しく頬を撫でた時、秋留が突然聞いてきた。

「モンスターとか知能のほとんどない奴ならともかくな。人間がそんな事するなんて許せない」

俺は自分の声が少し震えているのに気づいた。

秋留の事となるといつも平静ではいられない。

暫く二人の間に沈黙が走る。

頭上のカモメの群れが鳴いているのに気づいた。

「ありがとう」

カモメの鳴き声にかき消されてしまいそうな小さな声で秋留が言った。俺は思わず秋留の方を振り向いた。

その顔が少し赤いのは気のせいだろうか。

「さっつて、あと少しで久しぶりの陸地だね！」
そつだ。

航海は思った以上に波乱があつたし長かつた。

デズリーアイランドからアステカ大陸への航海は無事に済むといけどなあ。

「おゝい、ちよつと手伝つてくれ」

俺達に向かつて船長の低い声がかつてきた。

俺と秋留は一緒に走り始めた。

「帆を張れ〜！ 碇をあげろ〜！」

船長が叫ぶ。

身体のうちこちを怪我している船員達が頑張つて作業を始めた。

リーの説明した予定より三十分遅れで船の出発準備が完了した。それもこれも頑張つてリーが全員を励ましていた結果かもしれない。多くの仲間を失い、本人達も死ぬかもしれない状況に立たされた。今、船員達に必要なのはやる気なのだ。

船は二隻の海賊船を従えて無事に進み始めた。

デズリーアイランドの人達に誤解されないように、海賊船の真っ黒な帆は外され中央にハートの書かれた真っ白な帆が張られている。デザインしたのはイザベラだ。趣味が悪すぎる。これではかえって誤解されてしまいそうだ。

「やっと出発だな」

俺は伸びをしつつ言った。一仕事終わった後の風が気持ちいい。

「そうだね。久しぶりに少しゆっくりしたいよね」

秋留も一緒に伸びをした。伸びをしている姿も可愛い。

「水着でも買って久しぶりに泳ごうかな」

「ぶっ」

「ぼおおおおおお」

俺の鼻は無常にも真っ赤な飛沫をあげた。

それと同時に三隻の船の煙突から真っ白な煙が音を出して噴出する。

赤と白で縁起が良い。

待ってるよ！

夢と欲望の楽園デズリーアイランド！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0333d/>

盗賊ブレイブ@海賊と体力測定

2009年3月24日08時51分発行